女學雜誌

第二百五十一號
明治二十四年二月七日發

下六番町六番地
女學雜誌社

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 251. FEBRUARY, 6TH. 1891.

第二百五十一號目次

女學雜誌　第二百五十一號　明治二十四年一月七日發兌

社説

教育上、勅文禮拜の事を論ず

第一高等中學敎諭内村鑑三氏が、勅語禮拜の事に對したる行為に關し、世上の論評引も切らず、之よりして、基督敎と帝室との關係に論及するものあり、業々しき臆説切りに喧傳す。吾人は之を以て左程の事と思はざれど、好き折なれば一應愚見を吐露し、兼てより官の敎育家に忠告したしと思へりし條々を開陳すべし。

夫れ、日本皇帝の臣民にして、孰れか敢て陛下に敬禮を盡さゞるものあるべき。左れば勅語綸言に對し、亦何人か之を尊重せざるものあるべき。あらば吾人は之を目して日本の臣民にあらず、吾等が同胞にあらずとして酷蔑擯斥すべし。思ふに、平素忠君愛國の心掛に切なりと聞えたる内村鑑三君其人にして、何を以ての故に敢て此の大不敬の事を爲さんや。左らば君が初めに之を拒みたるは何の故ぞ、當時勅文を捧げたるもの命じて之に禮拜せよと言へりし乎、而して禮拜の意義たる英語の所以るヲルシップに當り、偉大靈を崇拜するに均しきの主旨を以て之を禮拜せよと言へりし乎。苟くも然りとせば、知者の之に反對し、拒んで肯んぜざるは勿論の事なり。内村君の精神もし茲に存せば、天下滔々悉とく君に逆らひ立つと云ふと雖ども、吾人は獨り君に贊せんことを欲す。然れども君后に至り悔改する所ろありと云ひ、書を公けに示して衷心を辨じ、改めて禮拜すと宣言す。所云る后の禮拜なるものは、果して敬禮の意義か、敬禮を表するは、邦國臣民當然の情のみ。或ひは敢てヲルシップすと云ふ乎、吾黨の斷然同意せざる所ろのもの也。

世人此事を目し、帝室と基督敎との關係を辨ずるものとなす。然れども吾人が學ぶ所ろに據れば、基督敎に於て、帝室に對するの行爲を特更に敎示するとあるなし、基督敎の聖經は唯だ言へり、「王を敬まふべし」と、吾人は未だ嘗て其他の細務に付き聞く所ろあらざる也。其の何如にして王を敬ふべきやの覺悟は、敎徒各自の判斷に存す、内村君の行爲は内村君一個の判斷にして、基督敎此の如く判斷すと云ふ可からず、故

に之を以て帝室と基督教との關係を辨ずる者の如くに言ひ做すは甚だ誤まれり。

但だ夫れ文字に對して崇拜(ヲルシップ)するの一義に至つては、基督教眞理の固く執つて聞かざる所ろのもの也。然れども之れ只だ基督教の者か言ふのみにあらず、文明の學理と高尙なる道德とは皆な如此く言へり、樸跟帋塵に對して靈性を献げ、本心を誠にして之を崇拜するが如きとは、啻に其事の爲す可らざるのみにあらず、實は得て之を爲し難きもの也。たとひ万一得て之を爲すべしとするも、わが、陛下は如此き蠻野の行爲を太甚しく嫌惡し、夙に臣民に戒しめて其事なかるべしと宣り玉ひき。明治元年三月十四日、天皇紫宸殿に御し、公卿諸侯を率ひて、億兆を撫安し、國威を宣布するの詔を下し玉ふ。中ごろに曰はく、

朝政衰ろへてより武家權を專ぱらにし表には朝廷を推尊して實は敬して是を遠ざけ億兆の父母として絕て赤子の情を知ること能はざるやう計りなし……往昔……朝廷總て簡易にして尊重ならざる故に君臣相親しみて上下相愛す……近代宇內大ひに開け各國四方に雄飛するの時に當り獨り我國のみ世界の形勢に疎く舊習を固守し一新の効をはからず朕徒らに九重の中に安居し一日の安きを偸み百年の憂を忘るゝ時は遂に各國の凌侮を受け上は列聖を辱かしめ下は億兆を苦めんことを恐る。

謹しみて見る、朝日の霞を拂つて現はるゝが如く、陛下は九重の雲を破りて、億兆に近づかんことを圖らせ玉ふ。其の大御言葉に言はく、如此くならずんば、父母として赤子の情を知ること能はずと。陛下は万民の父母なり、其の民を慈しませ玉ふの惠み有がたきこと限りなき哉。左るを徒らに九重の雲を重ね、帝室を人界以上に置かんとするものは、未だ陛下の大御心を知らざるもの也。故に陛下又宣り玉はく。

汝億兆舊來の陋習に慣れ尊重のみを朝廷の事となし神州の危急を知らず朕一度び足を擧れば非常に驚ろき種々の疑惑を生じ万口紛紜として朕が志をなさゝらしむる時は是れ朕をして君たる道を失なはしむるのみならず從つて列祖の天下を失なはしむる也。

陛下は常に宣はす、舊來の陋習を破れ、上下心を一にせよ、廣く會議を興さんと。則はち陛下は其至高至聖の尊嚴を平ら

かにして、敢て百姓の間に降り、億兆と共に倶に事を處せんとを好ませ玉ふ。知るべし、其勅語の文字を神の如くに崇め、愚民がお札に禱るが如く、之にヲルシップせんとするヿは、陛下の夙に戒しめて、万民に禁じ玉ふ所ろのものなるヿを。高等中學校長が、諸教員をして勅文に禮拜せしめたるの主旨、抑そも彼等をして之れをヲガマしめんとするにありし乎。既に之をヲガムとせば、事躰全く宗教上に關す、國王たる陛下に對するの敬禮にはあらざる也。而して宗教上のヲガミを爲すと否とは、事宗教上の見識に關す、校長は人の宗教の自由を束縛して、之に敢てヲガマしむるヿ能はざる也。如此き憲法の害傷は、陛下の嚴に禁じ玉ふ所ろのもの也。

然らば則はち高等中學の校長は、勅文に面し陛下に對するの敬禮を盡さしめんとしたる乎。陛下は汝臣民と倶に拳々服膺し咸な其德を一にせんヿを庶幾ふと宣す。吾等臣民の常に務むべき所ろのものは、拳々服膺して聖意を奉躰し、日に其德を守り行ふの事にあらずや。臣民たるもの居常之に順がふヿをせず、行つて克く忠孝たるヿ能はずんば、日に百千度勅文に禮拜すと云ふと雖ども、實は勅語を無みするもの也、陛下に忠ならざるヿ之より太甚しきは無し。苟くも一校の長として教育に聖意を奉躰せんと欲せば、勅文の文字に對して拜するヿ拜せざるヿを問ふに先だち、即はち帋に文字を印したるものに對して頭を下げるヿの有無を試驗するに先だち、先づ其教員の果して克く忠孝の人たるや否やを穿鑿せずんばある可らず。其人の品行芥よりも汚らはしく、醜聞世評に流れて万人皆な之を知れるにも關はらず、其の倫理の教場に於て勅文に對し一拜したるの故を以て、則はち之を陛下に敬禮を盡したるものとするに至ては、教育を旨とする學校々長の處置としては、不都合淺からぬ事と云ふべき也。教育には特に實踐を尊とみ、道德には深く僞善を惡くむ。然るに今勅語の主旨を實行するヿを勉めずして、只だ其虚禮に流れ、公々僞善の式を行はせて、之を生徒の眼前に表白するに至ては、陛下に對し不忠甚しきヿは言ふ迄もなく、教育上に於ても亦失策至大の處置なりと云はずんばある可らず。

近ごろの教育には僞善横行し、教師と生徒との間、初より相信ずるヿなし。倫理を講ずるものに至つては特に太甚しとす。教ゆるもの未だ嘗て初めより其實行を求めず、聞くもの亦之

を實踐せんとを期せず、只だ舌頭耳端に爲替を取引して、倫理の流通を遏え、時に外式上に背く所ろのものあれば、則はち囂々として騒ぐ、此度の事件亦之に類す。

敎育の現情を察するもの孰れか慷歎長大息せざらん、仁義忠孝は前世紀の遺言となり、人の之を唱ふるや只だシエクスピヤに感服して、其謠曲の辭を暗んずるに異ならず、而して偶たま虛禮に於て逆ふ所ろあれば、叫びて大不德の事となし、之を責むるとを以て漸やく道德を維持するの策となす、責むるもの必らずしも衷心に之を惡むにあらず、責めらるゝもの必らずしも之に服するにあらず、只だ社會外飾の虛禮を條規として、之を重んずるを以て人世の公德なりとす、去れよ、僞善、うはべに白璧を飾りて内に腐骨を藏す、醜汚何ものか及ばん、今の敎育家が、虛禮虛文に汲々たる亦た如此し。

日本臣民、誰か、勅語に對し敬禮の意を表せざる者あらん。だだ之を一定の禮文として人必ず之に向て禮拜せよとなさば、僞善の躰止を得ずして起り陛下の尊嚴を冒瀆するの不忠寧ろ太甚しからんとす。況んや忠孝の道、純潔の品行に於て未だ淸からざるもの、敢て冒りに進み、其勅文あるが故を以て輕々一拜一禮し、絶て其衷心居平の行狀に顧みざる時、校長も見て之を許し、生徒を見て之を常とするに至ては、勅語に敬禮を表せんとするの素願は、寧ろ反て學生に僞善を敎ゆるの失策たらんとす。此時に於ては初より未曾て禮拜の虛文を爲さゞるに若かざるべし。今の情勢を思ふに、即はち如此し。

左れば、吾人は敎育上より觀察し、勅文禮拜の如き式を行はざらんとを希望し、而して勅語の聖意の實際に行われんとを尤深く熱望す。世人往々陛下の名を濫りに用ゆ、自から揣りて勢力なきものに會すれば、則はち勅諭を拜唱す、吾人之を聞く毎に未曾て戰栗栗然たらずんばあらず。

帝室と基督敎

世の人切りに問ふ、帝室と基督敎との關係何如にと。其意、蓋し基督敎が帝室に利あらざる歟を疑がふものに似たり。吾人屢ば如此き問ひに接し、世人が基督敎を知らざるとの甚しきを痛まずと云ふと無し。基督敎とは何んぞや、大敎師基督に據りて、天地の眞相を解釋し、人の運命を認識し、以て人間當に他を愛し、自己を犧牲にすべき所以の道を敎ゆるも

のにあらずや。其愛を說くとの深きと、其良心を發揮せしむるとの切なるとは、自から儒道佛敎と等を差ふものなくんばあらず。然れども其の人間に眞理を指ざし示して、之に安心立命の地を與へんとするに至つては、趣き素より一なり。此故に、其眞理となし、又安心立命の地となす所以んのものに至りては、三者各々相ひ異なる所ろなきを得ずと雖ども、其の何ものをか守りて道となすの理に於ては、皆な互ひに均し。されば、基督敎は上帝あるとを信ずるが故に、帝室に利あらずと云はゞ、儒道は天を重んずるが故に、佛敎は法界無差別を觀ずるが故に、帝室に利あらずと云はざるとを得ず。儒道佛敎にして空々たると風の如く、未だ何等の味を存せずと云はゞ止む、苟くも其の確認宣言する所ろの道なるものありとせば、此道や即はち儒道佛敎の認ためて天地の公道と爲すものならずんばあらず、而して基督敎が斷じて眞理となし之を其道なりとする所以ん亦如此けん。但だ其の信ずる所ろの解釋に至つては、敎は敎と相違ひ、說は說と相異なることあらん。然れども、政府は之が爲に、カントを生かしてホッブスを殺し、老子を追ふて孟子を招くと能はず、苟くも其說の國法政躰に害あらざるよりは、斷じて之が自由の解釋に一任せざる可らず。而して各の宗敎、各の理論は、其の各の道と信ずる所ろに順がひ、其所云る天地の公道に歸依して、法政を守り、國躰に忠順なるべし。明治元年わが皇帝は、五條の誓約を下し賜わり、其第四に於て宣はすらく、

一 舊來の陋習を破り、天地の公道に基づくべし

と。即はち天地の公道に基づくとは、陛下が臣民に命じ玉ふ所ろのもの也。彼の基督敎徒たるもの、萬古の歷史中最とも正しく最とも力ありし大勢の趨向に順がひ、文明の學術と人の運命とに最とも適切したる信仰に則つとり、以て上帝を信じ、人を愛し、世を樂しみ、法律を重んぜんとするに於て、抑そも何が故に、帝室に利あらずと云ふ乎。英米の民、ともに基督敎を信ず、而して一は帝政の下に忠順の臣民となり、他は共和政の下に自由の人とあれり。所云る基督敎なるものは、國躰の、帝政たると民政たるとを問ふとなし、たゞ帝政の下に於ては、忠臣となれ、民政の下に於ては良民たれと敎ゆ。啻に之のみならず、父母に仕へては孝子たれ、朋友に對しては忠實たれと敎ゆ。必竟其存するの地位に於て十分の人道を盡

よと教ゆるもの即はち基督教の主旨なり。如此き教理果して帝室に何の關はりあらんや。帝政と民政との利害得失を論ずるは政治學の責めのみ、基督教に於ては、たゞ國民として其義務を盡せよと教ゆ、如此き宗教果して帝室と何の關はりあらんや。

世人が事々しく、基督教と帝室との關係を疑はんとするは、識なきもの珍奇の舶來品に驚ろくに異ならず、先づ其の性質に慣るれば、敢て奇しむとなけん。



言行

○友の情　何をか友情と云ふ、アリストートルの曰く、愛せられんとはせず、愛せんとするの情ぞ、即はち友情なれ。

○政治家　ビスマーク曰く、余は一個の政治家なり、余が父國の平和と繁榮との爲に、國の必要と所望とのまに〱余が一身を献ぐる所ろの政治家也。

○幸福界　ムーアの詩に云く、チー婦女子よ、汝が姿と汝が魂しひとは、余が歩めりし總ての徑路の光たり、熱帶の日に曝さるゝ時、氷帶の氷に寒ゆる時、もし婦女子あらば其處に幸福あり。

○女の敵　シエクスピヤ曰く、ウソと、臆病と、生れの低きと、三のものは、女が尤とも多く嫌ふ所ろのもの。

○やさし　ルーテル曰く、全世界に於て尤とも優しきものは何ぞ、聖淨の思ひを凝めたる婦人の心即はち是也。

○愛の宮　ドライデン曰く、あゝ女よ、其眼、その唇、その頰、其の相貌、其容姿。愛と云へる人が、自身の手を下して、愛と云へるものゝ中に區畫したるに左も似たり。

雜録

電氣

森子

學術の進歩いと速なる中にも、電氣の進みこそ特に驚ろくべきものなれ。見よ、電信、電話、電燈の需要最も盛に行はれ、また電氣鉄道電氣船等もまた盛ならんとす。此上如何なる發明の起るべきか、未だ知り盡すべからず。米國に於て、去年の前半期間、六百萬圓程の金額をもつて、電氣諸般の工費とせり。一百萬里の電信線、三十萬里に及ぶべき電話線、四百里の電氣鉄道、一千萬餘の電燈あり。これ唯其大抵を記せるのみ。從て全國中かく計り需要多きにつれ、電氣は果して安然なるものなりや」の疑を生ずるは、亦止を得ざる理にして、吾人がこれを研究するもまた利なきに非るべし。

電氣線は積極と消極の兩電氣線の相合するにより、熱も出で、電光も、勢力も、出るなれ。さなくして唯に一線のみならば、決して害を人身に及ぼすことあらじ。流動電氣の銅線を通ずるや、必ず人躰の血液運行と均しく、常に強弱の度あり。左れば電燈は時に明暗を生ずるものなり。積極の電氣のみ强ければ、明光薄く、消極の電氣積極のものに均しからざれば力弱し。さることあらん時は、唯だ明光暗くして赤色に變ずるあるも、兩極の電氣一時に相遇ふの時、その間に妨げあらん時ぞ、恐らくは變事の生ずるときなりと知るべし。さうして、電線に付ては、たゞこれに觸れざるの心することこそ肝要なれ。動搖も光りも熱も電信及び電燈線に於ては、その表面に見えずとは云へ、これに觸るゝに於ては、いく分か血液の運行に妨を生ず、殊に强勢の流通電氣を通ぜる電線に觸れば、直に心臟の鼓動を止め、死に至らしむることあり。電線の發火は始め微かなる赤色の光りによりて發し、のち青色の光りを發す。また微音を發するも、辛ふじて聞くを得べき程なり。電燈線の外皮を蔽ひたるものは、さのみに危險ならず、さりとてまたこれに近寄るべからず。身電線にふれ居るも、少しの痛みを感ぜざることあり、こは其人の性質によるも、多くは、知らざるうちに死することあり。電線其他のものに比して、危險少なく、またこれを防ぐの法も容易なり。たゞ人々の注意によりてさのみの害なかるべし。

二木の松を訪ふ

磐城　明日香主人

昔時は、實方中將勅勘を蒙りける時、歌枕見て參れよとて、陸奥の守とせられしが、實に名所古蹟を數多有てるは白河の關の奥なるべし。千賀の鹽竈、千松島、末の松山、金花山を始めとして都の人も宮城野や床しき國と名取川、信夫文字摺亂れしけん遠き昔を忍ぶ山、嬉しき御代に逢隈の川の邊に、懐かしき人忘れずの山もあり、一々數へわげんには、なかなかに筆の命毛も絶ぬべし。

二木の松も亦古しき世より其名高かれど、今は却て知る人稀なり、訪ふ人なきも理りなりや。余此頃好き機會のありて、此松を訪ひき。能因法師の歌に、

「陸奥の二木の松を人とはゞ岩瀬の森の西と答へよ」

此に依りて先づ岩瀬の森を尋ねしに、須賀川の北なる小高き岡にして、藤公鎌足を祭れる所なりけり。其より西三里許りにして、大里村あり、宇淺里と云へる所に、正一位武隈明神の社あり、此社頭に在るもの、即ち二木の松なり。余取あへず、

「尋ねきて今日逢くまの松なりきいはせの森の西ときゝしは

昔し天智の御宇、藤原鎌足公、常陸の鹿島へ下向せられしとき、二木の松の名を聞て、訪ひ來り、神地社領など寄附せられて、左の歌を遺されたり

「遙なる程を思へば武隈の松の緑も君が行すゑ」

隨分古きものなりけり。其後彼の能因法師、此松を訪ふて、「二木の松を人とはゞ」の一首を詠じ、再び奥州に下りしに、如何にしけん其松は枯れたりければ、

「武隈の松は此度あともなし千年を經てや我は來ぬらん

と戯れて、手づから二本の松を引植へて往にけり、之を能因手植の松とも云ひて、其廻り何れも二十尺許りありしが、近年はそれさへ枯れて、其後を相續せしは今見る若木の松なりとぞ。村長添田氏斯る名蹟の世に埋もれ果てんは、中々に口惜しかるべしとて、我舊藩君阿部正備公の筆蹟を石に刻みて、此松の下に立てぬ、公は當時白河城主なりしなり。公曾て此松を訪ひ給ひし時、藤公の詠を唐紙にものして、添田氏に賜ふ、石に刻せしもの是なり。公亦短冊を氏に賜ふ、今倘秘藏しぬ、

「名に高き武隈山の松が枝はしるしばかりに殘る二たもと

字々秀麗公に謁するが如し、坐ろに懷舊の情溢れて何とやら

ん袖をぬらす者ありき。余は添田氏に此日を暮して、神社縁起松の由來記など確かなるものを閲したれば、委しきことをも知りつれど、長ければ玆には省きつ。人若し世々の歌集を繙かば、此松を訪ひし都人士の數多ありしを見出し得べし殊に新古今後拾遺源氏等に、

「武隈の松は二木を都人いかにととはゝみきと答へん

など讀みたるを思ひ出で、

「武隈の松は二木を古しよりよきと語りし人ぞおほかる

「武隈の松を如何にと人とはゝ我もよきとそいふべかりける

など口吟して立皈りぬ。あはれ昔を忍ぶ、佳人君子よ、道を忘れぬ風流士達よ、滊車の便り往きかひに車を枉て、訪らひ玉はゝ、松も嘸な嬉しかるべし。古しへの野中の淸水ぬるけれど素の心を知る人ぞ汲む、とこそ、聞け。

くり言　　白髮の嫗

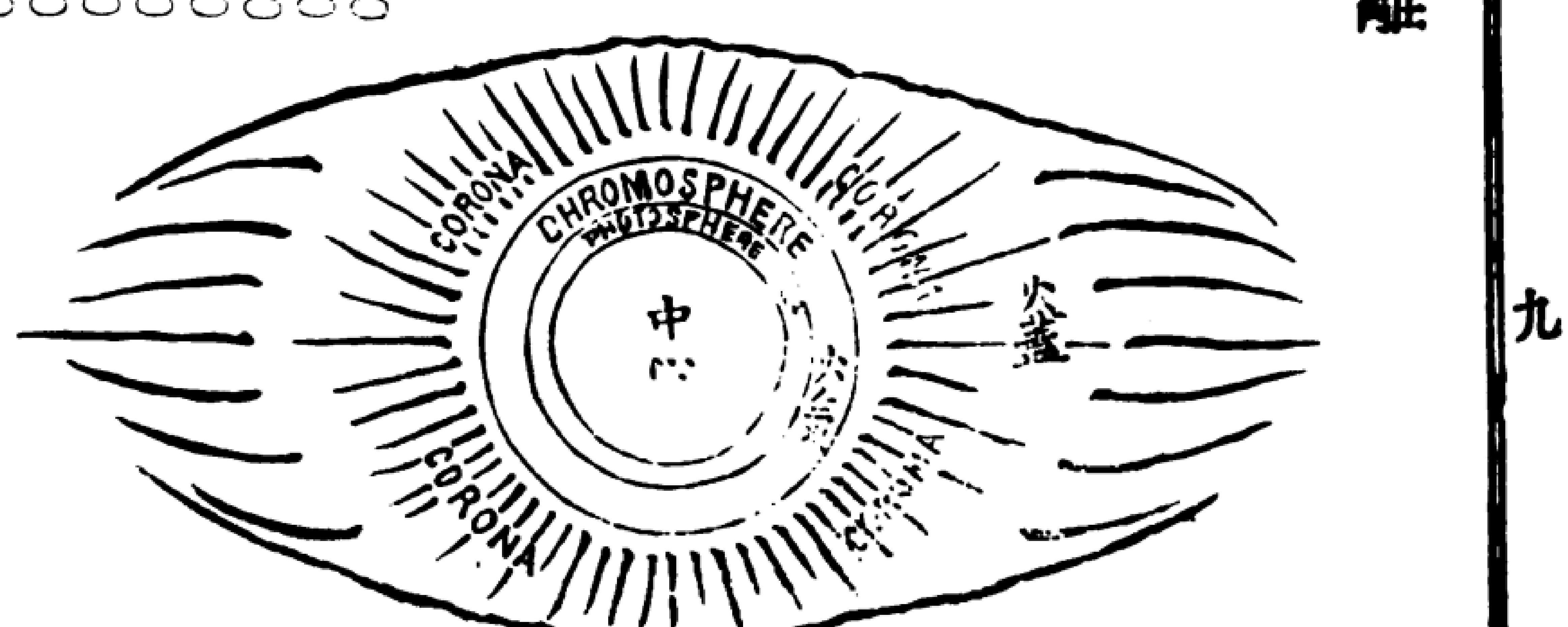
○鷄の水なしやむといふは、昔邊羅より渡りし鷄を指してしやむと、唱へしより始まれるよし、或る古き書物に見へたり。

手紙　手紙といふ名目古はなし手簡といふは手づから書きたる狀なればなり手簡を、てかんと讀み、てかん轉じて手紙といひ誤れるにや四季草にあり。

太陽のお顔と距離

冬の日は太陽のお顔を拜むと何よりも樂し。其近くして温たかきはすとーぶよりも樂し。頭らの上幾万里あるやは孔子すら御存なし。西洋人が彼此と計算したる距離は左の如し。

人名。	測量の紀元年數。	距離英里數
Hipparchus.	紀元前一五〇	五九〇〇、〇〇〇
Posidonius.	同　一〇〇	六二七九〇、〇〇〇
Copernicnes.	紀元后一五四三	四七〇〇、〇〇〇
Kepler.	同　一六一八	一三五〇〇、〇〇〇
Wendelin.	同　一六四〇	五八六〇〇、〇〇〇
Riccioli.	同　一六五〇	二九三〇〇、〇〇〇
Cassini.	同　一六八〇	八六〇〇〇、〇〇〇
Lahire.	同　一六八七	一三六〇〇〇、〇〇〇
Laplace.	同　一七九九	九二八〇〇、〇〇〇
Encke.	同　一八二四	九五三五〇、〇〇〇
最近の測量		九三八九〇、〇〇〇



○源頼光と坂田金時　　川合信水

坂田金時、勇力無双、向ふ所敵なし、頼光深く感じ、一日金時を召し、問て曰く、汝の眼中に於ては、天下懼るべきものなかるべしと、金時謹んで答へて曰く、懼るべきもの唯一あり、曰く何ぞや、曰く天命を懼ると。我父嘗て余に語りて曰く、彼れ天命を懼る、故に天彼を助く、彼れ此の至強なる助を受く、又た何ぞ他に懼るべきものあらんと頃ろ宗教の眞理を味ふに及んで、余は益此事を感ず、イエス曰く「身を殺して魂を殺すと能はざる者を懼るゝ勿れ唯爾曹魂と身とを地獄に滅し得る者を懼れよ」と、金時果して此深意を知れりや否や、然れども彼れ能く天命の畏るべきを知る、彼れの勇膽、豈偶然なりとせんや、世の勇を養ひ、膽を練らんと欲するもの何ぞ來て、思を此間に潜めざる。

○嫁菜　　ふみ子

○うき中になれて雪間の嫁菜哉」とは田氏捨女といへる俳人の句なるが、嫁菜てふものは斯くうき中に、ちゞかみながら生涯を送るべきものと定まり居しは是非もなし、今日はどうぞ左る氣の毒なる習慣を改ためて、姑も嫁を意地めぬやうにし、良人も無理をいはぬやうにし、折角春の野に生出たる可愛らしき嫁菜を、のび〳〵とさせ度ものなり。

家政

○咳を直す手輕の療法　　たえ子

咳を悩むを傍より見ほどつらきものはあらじ、人の苦しさは我が身の苦さみ違はざる如き心ちぞすなる、もし此にいたく咳する人のあらんには、先づその人の前に直立し、雙の手をのべ、拇指を頷の前部に押しつけ、人差指と中指は、耳と頷の間を確乎と押え、その儘患者の下頷を前後に強く引くべし、あまりに急激に運轉さすべからずよき程にこれを動したるのちは、患者に深く呼吸すべきよしを命ずべし。かくすることによりて、發病の人なれば、大抵治するなるべし、小兒にこれを行へども、多くは六七歳以上の頃ろならでは、その運轉に堪へざるべし少しの悩みも感ぜざること故、時節柄試み給ふては如何。



○燈火の美術

夜中燈火なき家とては非るべし吾國に近來電氣燈瓦斯燈など盛んに行はれ來りしものゝその器械のうるはしく飾れるに比

してこれを置く可き場所またその用ひ方に心をつくるもの少し。光の位置によりて折角心を用て飾し室内を見ばえなきものとなすのみならず、これがために、その部屋の美を害するにいたることしば〱なり。普通の家に用ふるランプ又は。怪げなる五分心のホヤ黒みたるランプは、云はゞ客室に釣る洋燈等は、成べく光力の強からざるようにすべし。また花々しき饗應などの外は、數多き燈火を避べし。燈火の數多ければ、四方の飾裝すべて見まぐらしく、また眼に反射すること多きため、明に過て却て注意なきをあらはすものと云べし。「ホヤ」の上より蓋ふカサと云るものに、いろ〱の種類わり、食堂などにては心して丸き光蓋など用べからず、廣き白色の光蓋か、また銀色のものをよしとす。食台の上には、多く花など飾わるものゆへ、時としては光を妨げ、一方を暗くする恐わり、故に二臺程の低き美き置ランプを用意すべし。食堂にともす光は臺所に及し、居間の火影は台所に達し、客間の燈火書齋を照が如くに、總じて家の建築よりすべてに心して光を都合よく用なば、いかに一家の經濟に利わるべきか、知べからず。近來ニユーヨークに於て電氣燈の光蓋に黄色の硝子を用ると流行せり、これ目の爲によろしければなり。赤色の光蓋は寒夜爐を焚て一家團欒の時によかるべし、夏の夕はみどり色の光蓋快きものあり、透明なるホヤのみにして、光蓋なきものは、無風流にして、嗜好心なきものとて笑はるべし。

毎夕居間などに一家族打集とき、その室内の燈火は、他の書齋また客間に點る火光よりも強を要す。一室に氣集て他室に氣を散すことなく、談話に大なる快わるべし。これ等は僅の事なれども、意を用べきことにこそ。鏡多き部屋には、日本にて空氣ランプと呼るもの、またスチューデントランプなど云る火光の強もの、兩三個を置て、決して多を用べからず。書齋寢室は、かの反射器のつきたるものか、置洋燈等を用ひ、かのハンギングランプを用ることをすべからず。洋燈を携へつゝ客の送迎等は、かたく謹むべし。消燈の後五分を經て、また一回これを巡視すべきを要す。火を點じたる儘油を注ぐべからず。ホヤの汚れたると、油の染み出たるとは、大に心すべきことにこそ。

いろ〱

銀を新しうする法　アンモニヤを熱湯に溶るあかへ銀を浸し、とり出すや否や直ちにかはかすべし。然してのち一週間も

これを精酒類(アルコール、または焼酎等)に浸し置べしのちこれを出し、ふき皮にてこれをふくべし。必ず光澤のうるわしくなるあらん。いつもシルバー、ソープもて、(銀を磨く石硷)毛皮及び熱湯を備えて、時々これをみがくべし。

陶器及び硝子を磨く法　最初熱湯に入れ、次に熱湯に溶したる石硷中に入るべし。のち白灰に入れたる濕りを帶べる海綿をもて、これを磨り、また新しき毛筆をもてこれをみがくべし。決して陶器を先に洗ふべからず。硝子を洗ひたるのち、陶器を洗ふやうにすべし。

食用小刀の洗ひ方　軟かきフランチルに、極こまかき洗ひ粉または磨砂の粉をつけて、これを磨くべし。灰などにて、こするは必ず忌むべし。小刀の柄なる象牙の部分は、長く湯などの内に置かざるよう注意すべし。色かわりて、また破れやすくなるものなり。

鏡を磨く法　アルコールに浸したるフランチルか、また海綿をとりて細き白灰を取りて、しづかに磨く可し。のち軟かきフランチルをもつて磨き、また絹のハンケチにて、これを全くぬぐひ去べし。また別法は曹達をひたしたる水にて洗もよし。

理學

吉田伸子

熱を良く導く物、及び導かぬ者

物體が熱を導く力は、物の異るに隨て、甚しき相違がございます。今長い釘の一端を持て、他端を蠟燭の焔に觸しめませば、暫時の間に堪られない程熱くなりますが、硝子の棒の一端を酒精燈の焔へ差入ませせば、棒の端は段々軟かになつて、遂に鎔解る位になりましても、一寸ばかり離れて持て居りませば、熱くて堪られぬ程ではござりません。これは鐵が硝子よりはよく熱を導くによるので、即ち物の異なるに隨て導熱力も亦異なる一例でござります。凡て熱をよく導く物を良導體と名け、よく導かぬ物を不良導體と名けます。をしなべて見ませば、金屬の様に緻密なる物は良導體で、獸毛、鳥毛の如き孔の多き、軟かなる物は不良導體でござります。

ラムフオルド氏は熱を導く力の強弱によりて、物體を左の順序に列べました、但前の物は後の物よりよく熱を導くのです

黄金、銀、銅、鐵、亞鉛、錫、鉛、硝子、大理石、磁器、粘土、木、脂肪或は油、雪、空氣、絹、木灰、木炭、綿織糸、錦、烟煤、獸毛、生糸、柔毛

附錄女學

女學雜誌第二百五十一號附錄
明治廿四年二月七日發行
定價四錢

盲女行

ジヤスミン氏作

雲峯子譯

盲女行

雲峯子

本篇の原文は佛國の詩人ジャスミン氏の手に成れるものなり米國の詩人之を英譯し、題して「The blind girl of Castel-Cuille. と云ふ、今重譯するに當り余は亦改めて盲女行と云ふ、—ロ氏本篇の先に附して曰く「英語を以て譯す時は遂に原文の妙味を失ふ讀者乞ふ、只意のある所を酌め云々と」英語に於てすら尚且然り、况んや日本語に譯するに於ておや、原文の主意を存するだに難事たり、然るに今匆卒に之を譯す、抑も感ずる所あればなり、されど原文と相比し、原著者を毀けんかと思へば冷汗額を濕ほすものあり、讀者乞ふ、本篇の妙味に至つては之を原文若くは—ロ氏の譯文に探れ、直譯にもあらず、亦意譯にもあらず、或は削除し、或は附加せしめしも多かり、讀者乞ふ恕せよ。

第一回　結婚

あしびきの、
ほどちかく、
丘ありけり、
遠近の、
村里の、
いろづきて、
うるはしき、
朝ぼらけ、
ふきかよふ、
一曲の、
きこえける、
　花咲き匂ふ
　花咲き匂ふ
　いと美はしき
　家立ち出て、
　いたゞく花の
　いとうるはしき

高き山邊に
カステル、キユレーの
春としなれば
すそ野に見ゆる
木の實もしろく
氣しきもいとゞ
ヨセフの祭りの
はだへ涼しく
風のまに〳〵
うたのしらべぞ
（うたに云へらく）
　道の邊を、
　道の邊を、
　新婦は、
　過るらん
　冠も
　花よめは、

今日道の邊を、
山の邊に、
雲井より、
山里の、
うちつどい、
ともなひて、
うたひつゝ、
下り來つれ、
ながむれバ、
うたひても、
慰さめんと、
下るてう、
知られけり、
つゞらをり、
たどりつゝ、
近づきぬ、
うたひつゝ、
谷間の、

過るらん
聞ゆるうたは
ひゞくと見れバ
若き處女が
人々侍女を
等しきふしを
岩根までこそ
高く仰ぎて
たのしきうたを
人のこゝろを
天つそらより
乙女もかくやと
やがても下る
迂出れるまゝよ
聖き堂にぞ
聖き歌をば
青葉茂れる
木の下道を

過ぎゆけり、
花咲き匂ふ
花咲き匂ふ
いとうるはしき
家たちいでゝ
いたゞく花の
いとうるはしき
今日道の邊を
新郎は、
もろともよ、
新婦の、
かんむりも、
見えゆけり、
ひさかたの、
はれ渡り、
のどかにも、
かゞやきぬ、
過ぎぬらん、

（うたよ云へらく）
道の邊を
道の邊を
花よめハ
過るらん
かんむりも
新婦ハ
過るらん
パプラストなり
ゑよしをちぎる
いたゞく花の
いとうるはしく
空いときよく
雲きえはてゝ
春の日かげぞ
花咲く野邊や
吹きくる風ぞ

かぐはしき。
いとしげく、
生垣の、
はなよめの、
うるはしく、
うたふにも、
處女等は、
思ふらん、
うちむれて、
提へつ、
うかれたち、
うちさはぎ、
たはむれぬ、
はなよめも、
ありけるが、
のがれいで、
うらやまん、
若人も、

花さき匂ふ
ひまより見ゆる
はなのすがたの
たのしきうたを
いとあどけなき
いかにうれしと
處女、若人
互みに手に手を
心もそらに
狂へるが如
雀躍してぞ
暫しの間
共に戯れて
やがて群をば
我身の上を
若き乙女も
年のうちには

嫁ぐらんと、
叫びけり、
人々は、
樂しみつ、
はなよめの、
ながめけり。
いづこより、
はなむこは、
處女等の、
うちに入り、
靜かにも、
居たりける、
はなむこの、
かんばせも、
見えにけり。
ヨセフてう、
云ひけらく、
情愛こそ、

聲たからかに、
かくて集へる
ところのかぎり
今日着飾れる
衣うるはしと
出で來にけるか
樂しく集ふ
笑ひさゞめく
ものをも云はず
といきつきてぞ
うきにしづめど
年まだ若く
いとうるはしく
なだゝるひとり
若氣にはやる
さちなき様と

なるらめと、　さはさりながら
はなよめは、　かしこきさがと
見えぬるは、　若氣の情愛に
あらざらん、　さるにはなむこ
はなよめと、　へだつるさまぞ
あらはれぬ、　よそにはかくと
見えぬこそ、　いとむつまじき
故なれと、　人は云ふらん
さりあがら、　なやめるさまの
はなむこは、　今や何をか
思ふらん、　何を悲しと
憂うふらん。

丘の上に、　のぼらん道の
半ばにて、　見るかげもあき
わらやあり、　こはあはれにも
盲目にて、　たのむかたなき
みなしごと、　なりはてにける
處女子の、　うき身をしのぐ

住家なり、　そが父上は
年老ふる、　武士なりとぞ
處女子は、　マーガレットと
呼ばれけり、　をとめすがたの
うつくしく、　此山里の
花なりと、　たゝへぬ人も
なかりけり、　ひと年むかし
バプテストと、　互みに愛でつ
ゑにしをも、　結ばん日とも
なりにけり、　あはれ悲しきかも
その夜より、　わずらひそめて
ほどもなく、　遂にめしひと
なりはてぬ。

その故に、　父は許さず
なりければ、　約ひし言は
わたし世の、　ゆめと消えしが
胸の内の、　かたみの愛は
遂になど、　變るべしやは

されバ今、　とこしへまでと
のぞみつる、　平和はあだと
なりはてぬ、　忍びかねけん
バプテストは、　遂に故郷を
のがれ出で、　行ゑも知れず
さすらひぬ、　再びかへり
来給ひて、　まだ間もあらず
三日ばかり、　過ぎけるほどに
ひとゞゝは、　かたくさりに
つなぎとめ、　理りもなく
アンゼラを、　娶れとのみぞ
云ひにける、　さはさりながら
バプテストは、　昔ながらに
なつかしき、　マーガレットを
今も尚、　いかでこゝろに
忘るべき。
群れゐたる、　人のうちより
聲たかく、　一人のをとめ

云ひけるは、　いざやをとめら
来れかし、　今やゼーンは
見えにけり、　されバと云ひて
ながむれバ、　遠き泉の
かたほとりの、　木の下道を
ふみたどり、　老ひたる女子
来りけり、　見るよりはやく
處女等は、　翼をもてる
鳥のごと、　飛ぶかと見えて
かけよりぬ。
ゼーンてう、　老ひたる女子は
世の中の、　来む日の禍福を
占ないて、　いとねもごろに
つげきかせ、　かつはさちある
いもせをば、　結ばんなかの
なかだちと、　なるとし聞けバ
里人は、　女子のかたる
言の葉は、　まことなりとも

思ひけり、　侍づく身なる
賤の女を、　娶るもあれば
あるはまた、　さちある身とも
亦りかわり、　たのしき月日を
送るあり、　また花よめは
うるはしき、　ひとに嫁ぐも
多からん、　女子の言は
僞らず、　また過ちも
あらじとて、　そをきかばやと
處女等は、　そが側らに
つどひけり。
心ある、　人はそを見て
かんばせを、　ひそみし事も
ありときく、　女子を見れば
白毛生ふ、　まゆの下より
するどくも、　双つの眼ぞ
輝きぬ、　いまのあたり
はなむこの、　たてる姿を

うちながめ、　顔をしはめ
はなよめの、　手を取りあげつ
答もて、　十字を空に
かきなしぬ、　さて云ひけらく
心なく、　今しも汝は
嫁げども、　汝がはなむこは
なさけなき、　人にしあれば
行末に、　あはれさちなき
身となりて、　死出の旅路を
いそぐらん、　さる日をのちに
まねかじと、　かたく心を
もたなゝん。
はなよめは、　女子の言を
きゝ終り、　ものをも云はで
ゐたりけり、　せき得ぬ涙
眼より　滴りけるが
流れゆく、　小川の水に
くらぶれば、　數にもあらず

はなよめの、　心のなげきは
しばしのみ、　むれゐる人々
やがてまた、　共に躍りつ
うたひければ、　また樂しげに
うちゑみぬ、　なに恐れけん
はなむこは、　色あをざめて
見えにけり、　あまたの人が
もろともに、　青葉茂れる
谷間の、　木の下道を
たどりつゝ、　たのしきうたを
うたひけり、　（うたに云へらく）
　花咲き匂ふ　道の邊を
花咲き匂ふ　道の邊を
いとうるはしき　はなよめは
家たち出でゝ　いそぐらん
いたゞく花の　かんむりも
いとうるはしき　はなよめは
今日道の邊を　過るらん

第二回　盲女　上

訪ふ人も、　たえてあとなき
山の邊の、　さびしき庵に
獨りゐる、　マーガレットは
あはれにも、　さちなき身をば
なげきあかす、　月日の數の
重なれば、　つかれはてしが
ひさかたの、　あまつ乙女を
見るがごと、　いとうるはしき
すがたこそ、　ありし昔に
かはらざれ。
ひとりのみ、　まちくらす身は
いかばかり、　わびしかるらん
心にて、　思ひける樣
パプテストは、　過る日歸り
給ひけり、　されどゼーンは
我中を、　むすばん言も

つげずして、　三日もあだに
過ぎにけり、　あゝ我君は
かへりけり、　されど我をば
訪はざりき、　なつかしと見る
すがたこそ、　我をばてらす
星なれや、　行えも知らぬ
ぬばたまの、　心のやみも
てらすなり、　今や歸ると
まちくらし、　夜はよもすがら
ひとりのみ、　物を思ひつ
なきあかし、　なつかしと見る
我君が、　さりにし日より
つかのまも、　忘るゝ時は
なかりけり、　いざや我君
來れかし、　互みにかたく
かはらじと、　かねて心に
ちかひてし、　さちある日をば
むかへあん、　君まさゞれば

わがこゝろ、　たのしと思ふ
ことなし、　こゝろにつもる
うきなやみ、　しげらん末は
いかばかり、　はかなき身とや
なりはてん、　朝日匂へば
世の人は、　ひるとなりぬと
よろこばん、　君なきわれは
かなしさに、　心のやみは
明けやらず、　ひるともなく
まよひつゝ、　ひとりなやむぞ
いとつらき、　あゝ我神よ
あはれとて、　なぐさめ玉へ
なつかしき、　君だにまさば
あともなく、　心のやみは
消えはてん、　雲はれ渡る
大空の、　色は青くも
見ゆるらん、　さてなつかしき
我君の、　眼は青く

かゝやけば、かなしみもなき
久方の、あまつ御國に
あるがごと、我こゝろこそ
うれしけれ、君と手に手を
取りかはし、住はん時は
世の中の、なやみも遂に
忘るめり、されど淋しき
我いほに、ひとりしあれば
くさ〴〵の、もの思ひにぞ
なやむなる、いづこに君や
在はすらん、我はよべども
いらへせず、土に倒るゝ
つたかづら、かゝるかたなき
身にしあれば、術もがなど
思ふあり、あはれと云はん
人もなく、うきに沈める
我なれば、なさけあれ君
うきことの、多き日にこそ

まことなる、愛はふかくも
なるめれど、人は云ふとぞ
されば君、めしひとなりて
世の人に、すてられし身は
あはれならずや。
わが君は、いづこに今や
在はすらん、われをばすてゝ
いにゝけん、あとに殘らん
我身こそ、うたてかりけれ
うき世をば、さりて墓にも
入らなまし、嗚呼我神よ
かなしかる、われをあはれと
思へかし、君歸らずば
わがこゝろ、狂はん外は
なしと思ふ、いともあがむる
神かけて、かたく盟ひし
君なれば、はや歸るらん
恐れなく、我は今より

待たなゝん、
つかれけん、
病氣に、
さる故に、
歸り得じ、
我君は、
よろこびを、
されど今、
訪なふらん、
こゝろには、
見ゆるなる、
逢ふまじ、
君なれや」、
しばの戸を、
入る人を、
思ひつめ、
マーガレットは、
立あがり、

長き旅路に
さらずば君は
惱むなるらん
心のまゝに
かくも歸らぬ
我にいかなる
與へんとすらん」
誰か我をば
目は見えねども
訪ひ來む人ぞ
我見ることぞや
とは君なれや
かくて庵の
半ば開きて
待にし人と
見えぬながらに
手をさしのべつ
近づきぬれば

弟の、
聲高く、
はなよめと、
過ぎにけり、
ことゝはん、
いかなれば、
入らざらん。
アンゼラは、
ゑにしをば、
はなむこは、
きかまほしと、
さればとよ、
汝が知れる、
いらへけり。

ポールなりけり」
そが云ひけらく
客人あまた
いざや姉君
君と我とは
人のつどひに
今日このごろに
結ぶなるとや
誰にやあらん
云へばポールは
バプテストとて
友とぞありと

盲女　下

めしひなる、
聲高く、
口を閉ぢ、

處女は今や
叫びしまゝに
ものをも云はず

そが畑は、
白らみけり、
冷えし手を、
あてゝけり、
絶えはてゝ、
なきがごと、
弟の、
すがたこそ、
形のごと、
あわれなれ。
またも謡ふ、
歌の音を、
かあしみと、
まさりけん。
きゝねかし、
たはむるゝ、
ひゝくなり、
歌の音を、

色なきまでに
氷の如く
胸にかたくも
脈うつ音も
命も今は
冷えにし身もて
近くに立てる
人そつくりし
よそに見えしも

いもせを祝ふ
きくにつけても
つらき思ひや

いとたのしくも
声は空まで
姉君きかずや
たのしく集ふ

ひとみなと、
いかにぞや、
結ばんは、
我もまた、
いざや我、
着なましと、
マーガレットは、
かへりけん、
胸にあて、
知られけり、
ことやある、
立ち出でゝ、
ゆかなゝんと、
こゝろをば、
ことのはに、
立ちあがり、
年老ふる、
入りにけり。

共ならざるは
されどゑにしを
明日とこそきけ
まねかるゝらん
手織の衣を
ポールが云へば
今や我にと
冷えたる手をば
明日は祭りと
ふかく悲しむ
汝はいほりを
心のまゝに
いともくるしき
しばしまぎらす
ポールはやがて
かけゆくあとに
ゼーンは庵に

今日のあつさに
息吐くことも
汝が身はかくも
死にはてんとも
ゼーンが云へば
悲しき事も
いもせを祝ふ
はるかにきゝつ
我身のうへに
時もや來むと
たのしかりけれ
我忘にしをも
いづこなるらし
汝に何とか
たのしき日をば
時を長しと
今我、君を
見ることゝちすと

いとつらき、
身もよはり、
かなはねど、
寒きにや、
見ゆなりと、
マーガレットは、
なかりけり、
歌の音を、
やがてまた、
たのしかる、
思ふこそ、
汝がまた、
結ぶらん、
バプテストは、
云ひにけん、
待ちくらし、
思ふらん、
まのあたり、

いらへけり、
ふるはしつ、
汝が愛は、
ならざらん、
もつ愛の、
大神の、
いのれかし、
いのらなん、
かくあれば、
罪ならずと、
ひと言も、
くちをしけれ。
マーガレットの、
絶えにけり、
知られじと、
そらあひの、
かたりけり、
顔ばせに、

ゼーンは身をば
知るよしもなき
さちある身とは
汝がこゝろに
消えはてんをば
前にふしても
我も汝がため
神のみこゝろ
わが云ふことは
云ふより外に
なかりけるこそ
望みは今や
されどこゝろを
いとたのしげに
よしあしなどを
語らうごとに
笑みをふくみて

見えければ、　そをまことゝも
思ひけん、　夕ぐれ近く
なりぬれば、　いざ歸らんと
立あがり、　ゼーンは云へらく
マーガレットは、　今日のことをば
知らざりけり、　かくてぞ神に
すくはれん。
おろかなる、　ゼーンはなどて
來む時の、　禍福をつぐる
巫女ならん、　今處女子の
とゝろをも、　悟らぬを見て
知られけり。

第三　幸及不幸

鐘の音も、　ひゞき渡りつ
おさづく日、　空に白くも
かゞやきて、　二つの庵の
處女等の、　二人のさまの

ことなりて、　見えにけるこそ
うたてけれ。
客人は、　あまたつどひて
アンゼラの、　手をばとらへつ
祝ふあり、　花の冠りを
着くるあり、　あるは花もて
うづだかく、　そが胸じをば
飾りけり、　立ちて見、居て見
花よめの、　あたりに人の
どよめきて、　今日アンゼラは
貴とかる、　女王の如く
見えにけり。
めしひなる、　一人は今や
花の香も、　花の冠りも
あらなくに、　いぶせき庵に
獨り居て、　何を探りけん
玉くしげ、　箱の奥より
取出だし、　かたく胸にぞ

ゐてにける。
くるうごと、
うきたちて、
アンゼラは、
忘れけん。
あはれなる、
冷汗の、
まごゝろに、
うちふして、
我つみを、
さゝやきぬ。
めしひなる、
弟に、
しづかにも、
會堂に、
さく花の、
いかばかり、
つらかりけん、

心もそらに
たのしむ見れば
朝日の祈りも

處女は額に
したゝるばかり
もろてを合せ
嗚呼我神よ
ゆるし玉へと

處女はやがて
手をばひかれつ
道をまかりて
近づきければ
冠りの香にも
こゝろの內や
いまだ日かげも

てらなくに、
さむかりけん。
岡の邊の、
會堂の、
大空に、
あらだかの、
聞えけり。
いづこまで、
云ふ聲に、
今ははや、
會堂に、
そがうへに、
きかずやと、
さればとよ、
さちもあき、
知られけり、
いたつきに、
まくら邊に、

烝氣の空や
岩ねにたてる
塔は高くも
そびゆるあたり
なく音も淒く

我や來ぬると
ポールはやがて
步みも盡きて
近づきにけり
なく鷹の音を
いらへをすれば
今なく聲は
音づれとこそ
むかし我父
ふしける夜半の
かしづきしところ

たらちをは、心細げに
われは今、つかれはてけり
わがいのち、やがてもはてん
なきあとに、ポールをよくも
はごくめと、云ひにし時に
父うへと、汝と我身と
もろともに、なげきし事は
忘れまじ、その時鷹は
我いほの、軒のほとりに
聲たかく、鳴き渡りけり
さて父は、世を立ち去りつ
うつせみの、もぬけのからと
なりにけり、父のみはかは
あれかどよ、たてし墓標も
あるならんと、云ひつゝポールに
ちかづけば、とく入りねかし
はなよめは、やがて來るらん
妹君よ、とく入らなゝん

などてかく、恐れやすると
はげまして、神のめぐみの
あらまほしと、ポールは高く
さけびけり。
もはや身も、かなはざりけん
めしひなる、をとめはいとゞ
つかれはて、さけびし聲は
ものすごく、みはかの内より
なき魂の、呼ぶかとばかり
きこえけり、よわるを見ては
はらからも、何すゝめとも
云ひかねて、暫しがほどは
たゆたひぬ。またもポールが
云ふ聲に、共に堂にぞ
入りにける。
鐘の音は、岩ねをかけて
谷までも、さやかに鳴りて
天つ日の、光りのどかに

匂ふころ、
はなよめは、
入りにける、
巫女が云ひし、
思ひつゝ、
バプテストは、
見えにける。
アンゼラは、
事もなく、
たゞへつゝ、
よろこびぬ。
ゑにしをば、
なりぬれば、
はなよめに、
云ふ聲を、
めしひなる、
我君は、
望むらむと、

あまたの人と
堂の内にぞ
言葉を今も
物を思へば
いと沈みてぞ
外に思はん
いとうつくしと
さゝやく聲を
結ばん時と
指環を取りて
渡してものを
聞くより早く
處女は云ひぬ
我死なんをぞ
云ひつゝ刃を

身に加へ、
うせにけり、
うれしかる、
ひきかへて、
悲しくも、
うちつどひ、
うちかつぎ、
うたひつゝ、
なきがらを、
送りけれ。
いとあはれにも、
かなしきさまと、
家をば出でゝ、
道のほとりを、
つどへる人も、
みなもろともに、
いとうつくしき、
今日道の邊を、

あへなくなりて
朝のさまに
夕べとなれば
あまたの處女
白き衣をば
弔ふうたを
もぬけとなりし
みはかにこそは
(うたに云へらく)
道の邊は、
なりにけり、
なきがらは、
過るらん、
あはれとて、
かなしまん、
なきがらは、
過るらん。

(完)

遞信省認可

東京麹町下六番町六番地　女學雜誌社

發行兼編輯人　巖本善治
印刷人　堀口庄三

建築用材の熱を導く力

不良導躰は熱をよく導かぬ故、内の熱を外に出さぬため、又は外の熱を内に入れぬ爲には屈竟の材料です。それで植物は雪の下に隠くれて嚴寒を凌ぎ、鳥や獣は其毛によりて躰溫を保護し、木でさえも其粗なる皮によりて寒を防ぎます。人が家屋を建るにも、不良導躰は壁などを造るに最良の材料です、實不良導躰を用ゐませば、冬は暖爐や火鉢から生ずる熱を外に導かぬゆへ、随て室内は暖であるのみならず、夏は外の熱を室内に導くこと少なきゆへ、極て涼しうござります。

次の表はハッチンソン氏が建築用材の導熱力を試験した結果でござります、但板石の導熱力を一〇〇として、

大理石	七五―五八	壁帯及壁土	二五
耐火煉瓦	六二	石膏	二〇
通常煉瓦	六〇	壁土及砂	一八
樫木	三四		

此外堅き木は柔かなる木よりも、生木は乾燥した木よりも、良く熱を導きます、乾燥した藁、木葉などは不良導躰ゆへ、軟弱な植物を被で、嚴寒から保護するにはよろしけれども、之れが濕潤ませば、却てよく熱を導きます。

小説

浮雲胸

野峯子

第二回　無任界

東天既に旭日の光りあらはれ、車馬のゆきかふ音高く聞え、鷄聲漸く市外の遠村に殘りぬ。女學校の内に鐘聲の聞ゆるは晨起の時を報ずるなるべし。やがて手拭を提げ、楊枝を口に井戸側に立出づる女生一二人、一人はしづ子なり、他は未だ讀者に紹介せざる人なり、つゞきて起き出る人あれど、平日の如く多からぬは日曜日なればなるべし。しづ子は顔をあらひ室に歸りけるが他の三人は未だ床にあり、そが一人はなみ子なり、他の二人は昨日夕刻に歸りしなるべし。今しも一人はしづ子の歸りて障子を開く音に眼を覺まし、「はや、夜は明けしやと」云へば、しづ子は「はや一番鐘なりぬ」と答ふる内に亦鐘の音す、こは「二番鐘」なりと云ふ、一人は之を聞きて起き上り、側らの一人を呼び起す、沖子と云ふは名なる可し、呼ばるゝ聲に眼を開きて、「とも子ぬし二番の鐘は」と問へばとも子は「はやなりぬ」と答ふ。兩人共に起き出づ、語る所親し

げなるは亦一對の友人にや、二人うちつれて出でぬ、鴛鴦の如く友人の二人に限るはそも如何なる故ならん。

しづ子は衣服を正し、髮を梳り、やがて机に向かひ、聖經を取出して讀み始む。時に日は隣家の軒ごしに照り、硝子戸なれば波子も漸く眼を開き、しづ子を見て「御身は何時の間に起きしや、はや鐘はなりけるや」と云ふに、しづ子は最早七時半なるべしと云ふ。なみ子は床の内に在つて「などて昨夜朝みける如く一番の報鐘と共に起し給はざりしや」とて、不興げに云ば、しづ子は「妾が起き出る時度々呼びしが今日は用事なければ今暫らく起きず」と答へて眠り給へり」と云に「實に然るや、妾少しも知り侍らず」と云つ、なみ子は起出づ、立ち出づれば、しづ子は手早く室内を掃除す。

一週五日か六日の日課をつとむるの外更らに爲す事もなく、夜は燈下に机を擁して深くるまで打語り、朝は日高く上るまで甘眠す、而して咎むるものなし、只夫れ意の向ふ所に任かすのみ、休まんと欲すれば即ち休み、書を讀まんと欲すれば即ち讀み、禁則の所にあらず、許可を得るの限りは亦出る事も心のまゝのみ。

食事を終りけるにや、皆思ひ〳〵に室に立かへる、なみ子は机にうち向ひ、しづ子に云ひけるは「昨夜十二時打つ頃迄書物を讀侍りぬ、今朝眼覺めぬも理りならずや、何故と御身は云るれども小說の面白さに書冊を閉づる能はざりし、經國美談の上篇も可けれども下篇の妙なるに如かず、隆某の野の戰爭の如きは妙中の妙と云はざるを得ず、御身が小說を嫌ひ給ふは未だ味はひを知り給はねばなり、所謂食せずして味を知らぬものなり、乞ふ一度讀み玉へ、其甘き事砂糖の類ひにあらず、人間よろしく小說を讀むべし、然らずんば死すべし、何を苦しんでか日課にのみ汲々たる」と、笑ふが如く嘲けるが如し。されど波子はもと性情淡泊、思ふ所は云ひ、欲せざる所はなさゞる質なれば、しづ子は少しも意にせず、否淡泊に云い放つ所一層快く、友情を密ならしむるの媒なるべし。

なみ子は小說讀べしてふ持論なれば頻りにしづ子にすゝむ、しづ子は打きゝて「さもありなん時を得ばよまん」杯わしからぬ程にいらへしつ、十時とおぼしき頃校舍を立出でゝ、何處にか行きぬ、聖書を手にせしを見れば教會なるべし、伴なひし人數人。

あみ子はまたあとに殘りて昨夜の續きを讀み居たるが、不圖思ひつきたるものゝ如く紙取り出し、墨すり流し、暫し頭を垂れて考へてありけるが、やがて筆を取り、何か書き始めぬ、半紙に三枚計り書きしころ、十二時の報鐘をきゝ「はや十二時にや今日は時の早く過ぎし心地す」抔ひとりごちつゝ、立上りて出で行く、また食事なるべし。

二時頃車にのりて校舍を出で行くはなみ子なる可し、親戚の家に行くとて許可を乞ひぬ。車の停る所は叔母の家なるべし、此處は四谷のわたりなり、此日叔母の家に來合はせたるは何處の紳士にや、今しも叔母の紹介するを聞けば、なみ子と同縣の人にて昨年大學を卒業し、今は某地の開業醫をあし居るとぞ。紳士は勿論交際の道に長けたれば絕えまもなく四方山のはなし抔す、なみ子も亦劣らず語る、話柄轉ずる事數度、新聞雜誌の事に至りぬ。紳士云ひけるは今の新聞雜誌多くは輕薄にて徒らに文を弄するもの多し」と、慷慨のさま舌頭に出づ、なみ子は之に應じて「然り、然れども一概にさ云ふ可からず、福澤氏の時事新報何時もながら老成の文にて亦氣骨ありて面白し、日々新聞は近頃面白からず、田口氏の經濟雜誌、亦老練の文と云ふ可し」と、滔々辨じ出したる懸河の辨、止む時もなければ、醫師は困り果てたる樣なりしが、やがてすきを見て立歸る。なみ子も御母に用事ありしよしなるが事すみぬらん、亦車に乘りて歸校しぬ。何處にて聞き取りたる事を記臆して今日は語りけるにや、醫師も歸りて「今の女學生は恐ろしきものかな」と驚嘆せりとぞ。默せんと欲すれば即ち默し、云はんと欲すれば即ち云ふ、また是心に任すのみ。

なみ子の歸りける時しづ子は既に室にありき、「何時歸り給ひしぞ」と、なみ子が云ふに「一時頃なるべし、親戚を訪なひて歸りぬ」と答ふ。暫らくしてなみ子は今朝書きたる物を持ち出でしづ子に示しつ「妾今一篇の小說をものせんと思ふなり、今の世の人未だ文明の何物たるを知らず、依然舊習に泥み、男尊女卑の風、革まらず、斯くては女權擴張も覺束なかるべし、されば女性壓抑の弊害を寫し、女尊の風を起すは國家の爲め必要の事とす、今題を「日本の花」と名づく如何と云ふに、しづ子は打きゝて「妾かゝるものは知らねど面白かる可し」と答ふ、談話止めばなみ子はまた筆取り上げてかきつゝけぬ。

しづ子は何か頻りに感ずるものゝ如く紙にかきつゝ、夜に入

りて波子にそを示しつ說く所を聞けば、今日教會にて聞きし說敎の事なるべし、女子の責任てふ事につきてはなし居たり、始めの程波子は默して聞き居たりしが、「妻は夫に從ふべし」とあるを聞き「大ひに不賛成なり、妻若し夫に從ふ可くんば亦夫も妻に從ふべきものならずや、偏頗の論は文明の世に行はれず」と云つて亦聞かざりければ、しづ子も今は詮方なしとて語らざりき。

「農夫誤つて種子を石上に投ず、根を發する事なければもとより芽は出でず」とある句を思ひ出で、しづ子は波子の心、いと頑固なるを嘆きぬ。されど終りまで堪へ忍ぶの幸ひなる事を知るが故に、日夜熱情を吐ひて上天に訴へぬ。されどよそに見る人は如何で知らんや、輕々薄々塵の如く紙の如き人情なる世に於て眞に友情を厚くし、眞愛を有するもの天下に多からず、黃金を以て交はり、快樂を以て交はり、舌頭を以て交はるものは多かり、しづ子の如きに至つては眞誠の交情を盡すもの、世に多かるまじ。

明くれば月曜日なり、しづ子はまた例の如く熱心に日課を修む、栽縫の如きに至つては殊に心を止む、なみ子は之を見て「御身は今日に當り斯る事にのみ心を留めず、少く文章を學び給はずや、文明社會に立の女子よろしく意見を天下に述ぶ可し、之を爲の道、只夫れ文章と辨舌とにあるのみ」と云ふ、されどしづ子は例の如く日課の重べきを說き、なみ子の云所に從ず。

かくして過ごしける幾歳月にや、はや間もなく卒業の期ありと聞く、なみ子は日夜日課にはつとめざれども天性賢ときさがなれば人に劣るともなし、しづ子は常に刻苦精勵止む時なければ、一級の首坐を占有するも理りなりとて、之に競はんとする人もなし。

人家におれば思はぬ事も出できつ、忙がはしき時も多かれど學びの窓に在る身はさしたる事もなく、定まれる所をなすを以て足れりとす、怒る人もあければ氣を兼るともなし、僅かの規則をだに守らんには責らるゝ憂ひもなし、殆んど身を煩はすものあらず、世の中は斯るものにやと思ひて心安く、日を經る人のみぞ多かる。何ぞ知らん、他日千辛萬苦身を圍むの日來らんとは。然れども辛憂に遇はずんば、世路亦樂土たるのみ、優々快々樂しみくらす幾多女學生の集る所は、眞に無責任の所なるべし、世の波路を渡る人に比すれば。

批評

文づかひ

撫泉子

新著百種第十二號は面白き小説二篇を揭げ、兩々相對して極めて格好よき色取を呈はしぬ。第一、鷗外漁史の文づかひは、何ものかの飜譯めける跡見ゆれど、左して思ひ當らねば固より原著なるべし。西洋の貴族には大和と同じき壓制結婚あるよしを思はせんとて、黑き衣着て終生浮立たず、初め操練を見たる景色より既に憂鬱の人たるとを現はせる、未婚の寡婦イ、ダ姫が悲慘の一生と、牧場に思ひ、窓下に思ひ、艀に思ひ、思ひ〳〵て遂に月さへ波靜けき夜半、ムルデの河に身を沈めたる羊飼の童が極痛の成れの果とを寫しぬ。文章は、舞姫よりも、うたかたの記よりも更に雅なり、和文に於ける漁史が妙所を悉とく煥發すと云つべし。全篇打しめりて何となう物がなしく、言足らぬうちに無限の感慨をたゞよはせて、人を動かすと尋常ならず、われはいよ〳〵漁史が文才の巧みなるに服す。たゞ此上は、舞臺を獨逸ならざる我國に置え、日本人のみを用ひて一篇の趣向を搆へ玉へ、是れ小説に於ける漁史が眞技倆を現はすの方とす。

聖天様

世を出で、彌よ世に沒し、靈に浮びてます〳〵慾に耽る、似而非信徒を嘲けらんが爲とか、弱き基督信徒と、貪ぼるとの深き俗欲家とを寫し出しぬ。文章奔馬の如く、歩々塵を擧げて俗物を蹴る、末文蛇足に似て、露伴子が常の斷岸絶壁主義に同じからず、太はだ惜しむ。左れど、今世の俗人情を穿つ筆力、例の如く凡ならず。

百家說林卷の二

此書編輯の功らは、旣に第一卷を評する時に言ひぬ。今ま第二卷を得たり雨窓閑話、かたびさし、泊々筆話、玄同放言、北里十二時の五篇あり。泊々筆話を見ると頗ぶるうれし。

雅俗諸躰作文口授

鈴木弘恭氏の著なり。熟字を初めに擧げ、次に綴りて見せ、左りに雅文を置き、右に俗文を對するなど、作文教科書としては、用意略ぼ備はりたる者あるべし。

兒籃

信仰ある子供

ふみ子

誰かこの人の心の白糸を、染むれば染まる色となしけむ」とは昔の或るお坊さまの歌ですが、ほんとに此和歌にいふてある通り、人の心といふものは、どんなにでも染めれば染められるものであり升、尤大人になると、全く白糸と申譯には參り升ぬ、既や種々の色に染つてあり升から、望みの色にするには色抜きをするとか、又は外の色を混ぜて、染替るやうにせねばなり升ぬ。けれどもあなた方のやうな、子供の時は、それこそほんの白糸と申ても差支ない位、何の癖も付ては居らぬものですから、其何色にでも奇麗に染めるとの出來る、白糸の間に、充分によき人になれるやう氣を注けねばなり升ぬ。藍壺に陷まれば藍、紅壺に這入れば紅、何でも其染る處の塲合と、ならはし、敎へにより善くも惡しくもなるものですから、余程氣を注けねばなりませぬ。

私は今一人の可愛らしい子供のお話しを致し升う。私の知つて居り升る、或る傳道師の家に、六七歳になる男の子があり升たが、此子はお父さんが傳道師だけに、能つく神さまの道を悟り升て、子供には珍らしいほどの、確かな信仰を持て居升た。そして小學校などへ參りても、さながら小傳道師とでも申やうに、いろ〱自分の聞知りたはなしをして、外の子供に、一人でも多く神さまの道を知せるやうにして居升た。けれ共兎角世の中といふものは、神さまの思召しでどんな工合になされるものか分らぬもので、先頃此子のお父さんもお母さんも流行感冒で引續き死去り、此可愛らしい、此立派な水晶のやうな清い子供は、可憐にも俄に孤となり升た。

そして此憐なる、子供には、お祖父さんも、お祖母さんも、そして又兄弟もあり升んでした。そこで此子は叔父に當る人の家へ連られて育てらるゝ事となり升たが、叔父は別に惡い人と申でもあり升んが、誠に短氣な人で、自分の氣分の惡い日などには、酷く此子を叱り、時々は打擲などする事もあり升た。そうでなくてさへ暖い父母の懐を離れて、俄に他人に育てらるゝは、子供にとりては、如何程の悲み苦みであり升う。左るをまして此子供は、叔父とは申せ、かやうな短氣な人の、世話になり育てらるゝ事であり升から、子供心にも其

悲しみ、歎きは、尋常ではあり升ん。けれ共此子供は前にも申した通り誠に信仰の深い子供ですから、或時は泣き悲しむこともあつたやうでしたが、亡き父母の外に、神さまといふ最も大なる愛ある父を持つて居り升から、歎きの内にも大なる慰めを得て、何處かに氣丈夫な處あり、尋常の孤子のやうに、只だ可憐といふ形狀のみではあり升んでした。

或る日の事でしたが此子は誤て叔父の大事の茶碗を損し升たので、叔父は大變に腹を立て、いくら此子が謝罪つても聞入れず、懲しめの爲め追出すとて、此冬の寒夫に、夜中戸の外へ出し戸を〆切り升た。彼子供は始めの間はシク〳〵泣て居たやうでしたが、暫くすると誠に靜になつて何の音も致し升ぬ。叔父は追出したものゝ、流石肉身の事ですから、だん〳〵氣に罹つて、ソーツと入口の處へ參り、フシ穴から外を覗き升と、彼子供は、土の上へ坐つて俯首て居り、頻りに何か申て居り升た、叔父は不思儀に思ひ、耳を欹て、之れを聞き升と、子供は神に祈禱を捧げて居るのであり升た、そして、其祈禱の終りの言詞に。

「チヽ、父よ、どうぞ叔父を宥し玉へ、彼は誠に善き人でムり升、けれ共私しが惡るい事を致し升たから、叔父は私を斯樣に、ひどき目に遇します、どうぞ私の此祈禱に依り、叔父を宥して下さるやう、願ひます。アーメン。

叔父は此詞を聞升て、心から自分の非を悟り、急ぎ戸を開て轉び出るやうに走り出、彼子供を抱き上げて内に入り、夫れより后は、誠の父母も及ばぬほど、眞心から此子を愛して、憐れみ育てるやうになり升たと。

なんと皆さん、此子供は如何に立派に、如何に愛ある子供であり升か、私は皆さんが、この子供のやうな心掛を持ちなさる事を望み升。

笑草

わだまし＝世はこんなもの！

まさな

數寄を盡せる一軒の家、内外の飾みやびにして、主人と覺しきは二十あまりの婦人、かつて泥水社會に生活せしとは其面相にても知らるゝが、十二三の小間使との二人暮し、時々官員樣風の御方の御出入あるは、夫と大方は推せらるべし。其右隣には零落たる擊劍家のわびずまひ、二三人を相手の劍術

指南、日々〳〵お面、お突き、参いッた、参らぬのがた〴〵さはぎ。隣家の障子簞笥までが、ビリ〳〵カタ〳〵、いつも指南のはじまるときは隣家にて不平のはじまりなりし。其左隣には素人の角力者、疊の上をそのまゝの土俵、足をふみしめ、力を入れ、柱を相手の獨角力、ドシ〳〵バタ〳〵、壁も天井も落ちぬばかりの大騷ぎ。中に挾まれし悲しさには、毎日膽をつぶす程の目にあふものから、女主人は氣にやみて、近頃は官員樣の御出ある毎に、此事談出して、不平を洩しぬ。官員樣もとんと致し方なく、自ら移宅せんも大層なり、若し兩隣にて轉宅にてもせば、二圓や三圓にはかへられぬとの御意。兩隣の先生之を嗅ぎ出し、此せちからき世の中に、二三圓の只取りとは甘ゐ話と、兩人互に打合せの上、角力先生まづ隣家に行き。

でめんなせい、へ、ワッチハ御隣の角力者ですが、平常は御無沙汰を致します、實はこの度據なく轉宅せねば………甚だ申兼ますが、轉宅の入費として是非なくてはならぬ金二三圓貸してはくださるまいか、其中には………

ヲ、夫は〳〵御名殘多いことでござりますが………一寸御待ください

とて奥に入りしが、やがて出で來り、

夫はなにかにおいそがしふでございましよう＝金三圓＝これは失禮ながらお轉宅の御祝としてさし上ます、別に御返しには及びません

其は近頃ありがたふござります、いづれ近ひ内に御禮にまいります

とて、口と心とは大違なる互の挨拶もそこ〳〵に歸りければ

ヤレ〳〵うれしや、これにて左隣は騷ぎもなくある、ついでに右にも退てくれゝばよいに

その口の下、格子戸あけて入來たる彼の擊劍家

エー拙者は急にわたましせねば………

こいつしめたと皆まで言はさ、

みればさぞかしお心せはしきことならん、わたましの御祝儀として此一封＝金三圓＝さし上ますれば………

これは何より重寶のものを頂き面目に存じます

シテ何れへお越しに相成ります

左樣です、貴家の御隣の角力者と入替る積りでござります。

隨感

餓死

明石居士

北海道の人中村某我に語りぬ、數年前の事なりとか、道廳の小使を務めをりしなにがしといへる男ありけり、極めて心の幸なる人にて、常にふさぎ悲しむなどいふとなく、廳に仕ふる人々にも、おなじ町に住むたれかれにも、よく愛られおもはれしとぞ。然るに彼れの妻といふは、いと行のみだりなるものにて忍び男して夫に迷惑かくること數を知らず、今度も其の爲監獄署に入牢の身となりしが公に對しても是が三犯なりしとぞ。斯て放免の期も滿ち、明日は其日といふ時、かのをとこ同僚の者に語りて、惡しき妻もちし身は六十年の不作なりと世話にも云るは、實にまことにて、われらも其不作の爲には、人志らぬ歎きすと常の如く立ち働きて、やがて家に歸りぬ。翌朝日も高くなりぬるに、彼の男の家、戸を開かず、若病にても起りしにやと、合壁のもの相語ひて戸を開き入り見れば、かの男狹座敷の中央に白き衣着けて坐しをりぬ、前に机――これも白ききれもて掩ひたるありて、位牌、香爐やうのものあり、怪みて近づき觀ば、梁より糸の下りゐて、男子頸に纏ひをりぬ、また新らしき、位牌を見ば、何々信士と戒名、墨の痕も昨日今日のものらし、香爐には線香の今しがた絶しかと思へる程に名殘りなく盡、其香座敷にこもりゐぬ。さては縊死よと立ち騷ぐほどに、何樣は此方なりやと早桶擔ひて來るものあり。人々問答も未だをはらざるに迎僧來りぬ、いよ〳〵怪しく如何にと問ば僧のいはく、昨日の何時頃一人の男來り、――觀ば吁其人なり、――何町の何某家に物故りぬるものあり、明日は葬式をいとなまんに來り與よといふ、又望に任して戒名も得さしつ。その戒名は則ちそれなり、さては事みな覺悟の上なりしか、これは〳〵とばかりに人々言葉も出ず、事の奇異に打れてありしが、かくて有べきにもあらざれば、近所のもの相はかり撿死をも乞ひ、役揚へも届け、柩になほし寺に行みれば、菓子屋のもの蒸物を既に持參しゐたり、人々顏を見合せ いよ〳〵其志をあわれむもあれば、疎やからはさても死者の用心よしと竊に笑ふもありき。かくて葬りも果て卒都婆も建ちぬ、さらばとて送りの人も還りぬ、七日々々の讀經も僧は懇ろに務めをりしに十數日を經て石工寺の門を叩き、新佛石塔成り

ぬと告げ事に傘かし來ぬ。表面には何々信士、側面には某年月日歿享年若干と、刀痕深く彫りてあり。僧は且驚き、且感じ即ち其の墓に濟ぬ。凡ての費用は死者生前に拂ふべきは既に拂ひ、後なるは其の用意しありて人に少しの累もかけざりき。

かの淫ある妻は如何になりけん聞かず、彼れは六十年を待たず、妻の不作の爲めに餓ゑて死しぬとぞ。

文學

池袋清風大人　批（東京案山子の家社中）

時雨

、朝しも（霜ざけ）の露もまだひぬ木かくれ（山陰の）の落葉が上に時雨ふるなり

評。斧正にて趣致よくあらはれたり

、木枯の木の葉の雨をさきたてゝ山めくりする村時雨かな

評。あまり上手な詠也類歌なくばよし

木枯

、木枯に庭の紅葉（峯の木の葉）散りて（果て）けん松の音のみふくる夜半かな（高し山のへの里）

、群鴉このはと見えてさわくなり遠き（かな）野末の森（中）の木枯（の風）

思ひつゞけて歎く　清水濱臣

懸居翁の門人に、倭文子京橋弓町伊勢屋某女といへるは、才女なりしが、齡二十にて身まかりにければ、皆人をしみあひつゝ、かなしみの歌よめるを、彼倭文子の家集、文布といふ書のおくにしるしそへたるに、翁をはじめ門人男女の歌おほくのせたり、その中に、宇萬伎一人のうたなし、わきて親しかりければ、宇萬伎の母の歌もあるを、いかで宇萬伎の歌のみは入らざりけんといぶかしむ人あり、そは故あることにて、かの歌どもの中に、讀人しらずとて入りたる歌こそ、宇萬伎の歌なりけれ、いかにとなれば、宇萬伎はじめ、倭文子が娶とらざりしほどに、互に思ひかわして、密にかたらひしとの有りければ歌にも其心あらはれて

ひとりのみ思ひつゝけて歎くかな人にいふべき昔ならねば

とはよめるにて、名を顯はさむは、面ぶせあれば、よみ人知らずとはわげしなりけり。かゝる例は、撰集などにもつねあるとなり、これにつきて訝しき事あるは、新千載集雜下に、獨述懷といふ事を、爲家卿のよみ給ひしうたに、

とにかくに思ひ續けてねをぞなく人にいふべき昔ならねば

寄書

恐るべき犬疫病

柳々子

吾人が外出の好侶伴として常に提挈する犬に一種の恐るべき疾病ありこれを狂犬病と云ふ此病は猫羊猿豚馬牛等何れの家畜にも傳染し又人にも傳染する惡病なり世人若し狂犬病と云はゝ其恐るべき病ならんと想像を下すは其文字の現すが爲めにして啻に咬傷を恐るゝのみなり然り其咬傷の愈るは實に容易なるも其部に附着したる病毒は直ちに血液及神經に傳はり躰中に進入し咽頭及食道痙攣を起し水を飲まんとすれば一層甚し故に人に於ては恐水病の名あり其病原たる毒物に就きては歐米の學者「パストール」「コッホ」等の諸氏も未だ發見する能はざりき然れども其腦脊髓及唾腺涙腺鼻粘膜の分泌物中に存するは論を俟ざるなり故に成べく其咬傷を避くるは勿論唾液涙汁鼻漏等の附着せざる樣に注意すべし余は斯る危害の快活優美なる淑女君子間に及ばんことを恐れ未だ發起ざる曉に於て之を預防制遏せんことを期す。

此病毒は前に述べたる如く極めて細微なる創面より容易に進入するものなれば其危險云ふべからず而して公衆衛生上預防法のなきは何ぞや我國人の眼中には此恐るべき疾病も敢て恐るべきにはあらざるか果して然らば余は其大膽なるに驚かざるを得ず如何に自由放任を主張すればとて公衆上に對する保護條例なかるべからず當局者中にて鋭意敏捷の士多し其發布も近きにあるべし見よや我國將來に流行すべき牛疫の如きも載せて傳染病規則にあり況して現今傳染を見る狂犬病に於てをや余は此發布前に於て同胞諸君に警戒し聊以て注意を促がさんとす然れども其徵候を知るにあらざれば何れが狂犬病なるやを知る能はずして恐るべき病犬をも接近して最と親切に介抱し甚しきは之に接吻を與へて慰諧するが如きは世間往々見る所なり豈危險の至りならずや仍て左に狂犬病の徵候を略記すべし。

第一、此病にかゝりたる犬は所業何となく常に異り種々の物を咬み或は戸壁などに向ひて頻に吠へ容貌は獰惡にして鉄片木石草藁などの食物にあらざるものを食ふ。

第二、前期に次ぎ發するものは刺戟期にして動物は自己の室又は鎖などを破毀して奔逸せんとして齒牙の毀るゝ迄も咬嚙す斯くして後は再歸來り靜息して以上の徵は斷て去りしが如く主人の命令を遵する常の如し。

第三、此期に至れば嚥下困難にして咀嚼筋は麻痺し下顎骨垂下す遂には後躰も亦た麻痺し歩むこと能はず麻痺腦に及べば斃死す。

又或ものは第二期なくして直ちに第三期に移り二三日を經て大抵斃死す。

時事

○政府は醜業者の大會を禁止せざる可らず

來る十日江東中村樓に全國貸坐敷の營業者公然大會合せんとする旨風評す、果して眞なる乎、吾政府は風俗取締上如此き醜業者が公然常躰の場所に大會するとを禁止せざる可らず、彼等が都合ありて會議するは固より妨たげず、須からく遊廓内に退ぞきて夜ひそかに相談すべし、白晝と公會場とは彼等に堂々たる集會を許可するとある可らず。

○議會の大問題

農商務省に對する犬養氏等が質問の件は、眞とに大問題也、些々たる質問は用なし、かゝる事に於て嚴しく迫るとなくんば、議會は最早死せりと云はずんばある可らず、爭闘は平和の爲め也、如何なる時に於ても、又何如なる事にても、議會を靜穏にせんと欲するは迂愚の極也、丈夫或る時には怒立せざる可らず。

○ストライキ

社會主義の問題を考ふべき時機いよ／＼近づきぬ。府下の石工一千三百名は、去二十三日以后一週間同盟罷工（ストライキ）を爲しぬ。

○死刑廢止の請願

大內青巒氏、各宗協會に促がして死刑廢止の請願書を議會に呈出せんとす、之れ大ひに宜し、吾人は諸法師が熱心之に應贊せんことを希ふと共に、他の宗教及び一般仁人の諸君續々之に同意せんことを勸告す。

○又

又東京組合代言人吉澤義一郎氏は、國事犯罪者に對する死刑廢止の請願を爲さんとす。

○スピンナル氏

氏將に獨逸國に歸去せんとす、五年前、氏が本邦に渡來したるの日は、基督教社界に自由神學の曙を開きたるの日なりき、溫厚篤學の人、今や去らんとす、切に友を失ふの心地す。

○社會問題と基督教

神學上の閑問題は吾人が關はる所ろにあらず。今日の日本は生きたる人と、働らく人とを切要する耳。思ふに基督教會の制度今后大に改進し、會堂は社會問題の研究場、痛要場、救濟場たらずんばある可らず。

○豫算問題

豫算案の何如に决する歟は、今后一二年間の日本大勢に莫大の影響あり、而して其の如何に决する乎は、主として衆議院の方向何如に關す、其日數日のうちに懸る、何人か足を擧げ眼を峙だてゝ憂ひ煩はざるべき。見よ！。見よ！。

○議院の戰略

何派の掛引とか、何黨の奇計とか、日々の紙上に大相らしく書立る新聞紙は何の心ありての所作ぞ。何如に種なければとて、餘りに買過たる春秋なり。かゝる筆法にて書けばこそ、つけ上りてシャベルものもあるなれ。

○女學雜誌前號の社說

前號の社說「日本女學讀本編纂」の一文章、は鬱勃たる同志者が思想に火を導びくの電線となりつるが如し。之が爲に贊成し、尙且つ意見を添るの人頗ぶる多し。讀者願わくは之に再讀精窮の料たることを許せ。

○戸籍法中の庶子

今や貴族院に戸籍法案かゝれり、外山正一氏にして若し前言を重んじ、厚生館堂に、泡を吐き拳を握りたる當日の言質を思ひ起さば、庶子の一項に付きて、嚴酷に反對する所ろなかる可らず。

○音樂は何育なりや

衆議院に於て珍らしき質問起れり、曰く、音樂は德育か、智育か、躰育かと、辻文部次官も少し困却せられたる如し。然るに堂々たる井上哲二郎氏は、特に之が爲に辨じ、其答文を東京新報誌上に掲載せしめぬ。

○官立學校の辨

大日本教育會雜誌は、例の如く諸官立學校の必要を辨ずと題し數千言を重ねたり、左れど此は官立學校の必要を辨じたるにあらずして、其教育の必要を辨じたる也、必要なるもの必ずしも政府が着手すべきものならんや。須からく論答すべし何故に政府が餘計の金を遣つて自から之を擔はざる乎。

問答

可愛子

問。和英字書の極く委しいのさ、携帯に便利なのさ、二つ共に名さ代價を知らせて下さい(獨學生)。

答。委しいのは英和字彙(八圓ばかりでせう)携帶に便利なのは、ダイヤモンド(四五十錢でせう)代價の事は書肆にお聞きになれば確かに分ります。

問。原書でなくつて、假一冊内外の書で、官立學校入學試驗の準備に修める、適當の萬國歷史がありますか(牛込新小川町住高木中學入學志願生の一人)。

答。天野爲之氏の著はした萬國歷史が宜しう御座います。

問。京都同志社看病婦學校を卒業した後さ、帝國大學第一醫院の實習生を終りたる後さ、結果に於て、何程の差がありますか(麻布住女)。

答。大層六ケ敷い御質問です、之にお答へ申すには、其教授法の如何、其教科目の如何、教師の人物如何、生徒の風習如何さ、又其卒業生の社會に於て、顯はしたる、行の實は如何さを知らなければなりません、けれどそれは、繁忙なる雜誌記者には出來ぬとです、故に卒して届くだけ觀察した私の所思を述べせまう、それも委しく申上るとは出來ません、一さ口に申せば、大學は其智識を得るに宜しく、同志社は其德義を得るによろしく、大學は物質的に重く、同志社は精神的に重く、大學は術を得べく、同志社は涙を得べしさ思ひます、勿論之れは學校の有樣を大躰に觀ての答です、之から出た卒業生が、何れが優れる、何れが劣れるさいふとは、其卒業生の働を觀た上でなければ、お答へが出來ません。

問。女學雜誌改進以來の社説は、巖本君の手に成らずして、清水女史の手に成る事ですか、又此後紙上に於て、巖本君の文を見るとは出來ませぬか(本鄕愛讀生、ま、の)。

答。改進の時の廣告に「但し、巖本善治が女學雜誌に關係する所敢て今日さ異なるとなし」さあります、されば改進前も、改進後も、同樣に、巖本兄は筆を執られます、社説はいつも、巖本兄の手に成ります。

新誌

可愛子

●時事新報　は一月三十一日の紙上に於て、生絲相場所と題する論題を揭げ、日本の士流か商を賤み、相場所を視ると蛇蝎の如くなるの非を辨じ、序でにプールス條例をも、輕く批難し、而して其筆を進一進せしめて曰く、今日東京に於ては、米商會所を設けて定期賣買の行はるゝか故に、新潟の商人は、遙かに其直段を聞て、直に賣買の約定をなし、跡より貨物を送るか故に、其取引は誠に安心なり、扨又我國の商品中に於て、重もなるものは生絲にて、輸出品の大半は、生絲にて占むる程のものなれども、其賣買の有樣は、不完全至極のものにして、安心の取引を見るべからず、若し今日生絲相場所の設けありて、定期の賣買行はるゝ時は、養蠶家が繭を賣るにも、製絲家が之を買ふにも、共に急ぐの必要なく、靜かに直段の成行を窺ふて、安心の商賣を見るに至るべし、又現今外商との取引不利なるも、全く生絲相場所の設けなきが故なり、故に我輩は先づ横濱に其取引所を設置せられんことを望む、それに就ても故障となるべきプールス條例は、廢止せられんところ望ましけれども、若し能はざるの事情あらば、之を死文として存し、特別の條例を發して、生絲相場所の設立を許可すべし、生絲のみならず、油も、鹽も、綿も、同じく此條例を設けられんことを望むと論ぜり、是れ時事子得意の議論他の新聞の及ばざる所なり。

通信

可愛子編

●廣島縣通信（下）

吉田駿逸報

尋常師範學校女子部 ——— 現今生徒の總數四十名許りにして、本年の卒業試驗に應ずるもの十九名、社會に彼是の風評起らざるを見れば、校舍の取締り、生徒の素行先つ善良の方なるべし、昨年迄は隔年毎に生徒の募集を爲し來りたるも、本年よりは毎年之を爲し、一度びに二十名乃至三十名を召集する事となりし由、而して學事の法令等、甚しき變更なき限りは、將來年を追ふて盛んに趣くとなるべし。

高等女學校 ——— 私立にして生徒の總員四十名餘り、昨年は兎角社會の風評宜しからざりしも、大に生氣つきて見へ、又昨年の轍を踏むことなかるべく、此勢にして進めば、將來多望なる校舍の一なるべしと雖、其將來の盛衰如何は、一に校資の饒否に關係するものにして、聞く處によれば、到底永遠に維持の方法難かるべしとの事なり。

廣陵女學校 ——— 一致教會の監督に係るものなるも、生徒甚だ僅少にして、振興の兆候更になく、終に昨年十一月不幸にも閉校せり、誠に痛惜の情に堪へず。

英和女學校 ——— 美以美教會の監督に係るものにして、昨年十一月新たに建築せり、生徒は三十名内外、何分開校以來日尚ほ淺く、現今の處にて別段報すべき記事なし、只祈る、主の惠みによりて、順次隆盛に趣かんことを。

女報

可愛子編

●御親祭　一月三十日は、孝明天皇御例祭に付き、宮中除服仰出され、午前十時御親祭を行はせられ、皇太后陛下は、午前十時青山御所御出門にて、宮城へ行啓の上御拜、尋て皇后陛下御拜、各御玉串を奉り給ひ、皇太子殿下は、地方御旅行に付き、御代拜あり、又午後五時より、宮内官束着床の上、夕の御親祭を行はせられたりとぞ。

●皇后宮の御仁惠　皇后宮陛下には、去年十二月々末、華族中にて、八十歳以上の高齢者を召され、眞綿を下し給はりたる由に承はる。

●内親王の避寒　昌子内親王、房子内親王殿下は、避寒の爲め、本月一日午前八時三十分御發途にて、神奈川縣相州大磯へ成らせらる。

●小松宮彰仁親王殿下の妃　頼子殿下には、本月三日、親王に御同伴靜岡に御旅行あらせらる。

●官に在る華族の婦女　は伯爵の女五人、子爵の女十人、男爵の女二人なりとぞ。

●女教師　東京府高等女學校生徒中、本年四月中に、師範科の部を卒業する者十餘名なり、何れも府下各小學校へ配置するといふ。

●三月出生の兒多く產婆爲めに繁忙なり　今年は懷妊者非常に多く、殊に當三月に出生すべき者多し、產婆は皆な臨月に近き爲め、晝夜奔走し居るとぞ。

●インフルエンザ牢中に侵入す　昨今市ヶ谷監獄署の懲役人中、インフルエンザに罹る者多し、殊に女囚に多く、彼の毒婦花井お梅も亦呻吟の中にあり。

●結婚媒妁統計表　東京日本橋區檜物町一番地、渡邊結婚媒妁所の報告中に、左の統計あり、

（前略）嫁聟呉方貰方の多少に依りて年の豐凶をトするに足る昨二十三年の如きは米價高直に付聟及び小兒の呉方頗る多し是れ即ち中等以下の社會が人口を減少するの證なる可し又融通宜き年は之に反す昨二十三年の統計表左の如し

呉方總計	七百七十名
内譯	
一嫁呉方	四百四十名
一聟呉方	二百五十名
一小兒呉方	八十名
右總人員の内 華族	十名
士族	三百九十名
平民	三百七十名

貰方總計	五百六十名
内譯	
一嫁貰方	四百卅五名
一聟貰方	九十名
一小兒貰方	三十五名
右總人員の内 華族	五名
士族	二百八十名
平民	二百七十五名

右總計の内結緣整ひたる人員三百九十名なり。此一班の統計は、未だ以て東京の全豹を窺ふに足らず、然れども亦一の參考となすに足らんか。

●絕世の美人　新任淸國公使李經芳氏、二妾を携ふ、年二十三、北京有名の美女、西施、楊貴妃以來、未曾有の佳人なりと、是れ肉に於ての評なり、靈に於ては皆人未醜の醜なる女性と信ず。

●婦人矯正會　は過般武州信夫郡福岡町に起りたり。

●武州伊達郡染折町女學の景況　同地は從來、女子の風習甚だ卑野にして、婦女は三絃歌舞に熱し、傍ら少しく文字を解すれば足れりとの謬見を抱き居る者多かりしが、此頃小學卒業の女子四五名發起となりて、一の會を開き、修身、經濟、生理、女禮等を學び、且つ女風改良の先導者たらんとを勉めんと、目下會友四十餘名に及べりと、願くは初めの志を挫くとなく、毅然として勉勵せられんとを。

●愛らしき生徒　武州信田郡飯坂町字城町の福井みきは、數年前、夫に死別し、女一人の細腕にて、三人の女子を養育し、窮困の中にも、二人の女子を小學校に通學せしめ居りしが、不幸の上に不幸は來り、一月廿一日の夜、失火の爲め、家屋全燒し、着るに衣なく、食するに米なき程の有樣となり、二人の女子も、通學する能はざるに至りしかば、學校の生徒等は、深く之を憫み、高等四年生と、三年生とが發起となり、全校生徒より義捐金を集め、其金にて彼の不幸の女子に、衣服及び學校用品を惠與し、其上若干の金員をも寄送せりと、先には三重縣に於て、安濃日學校生徒の美擧あり、今又此佳報に接す、誠に感喜に堪へざる也。

●伏見文秀女王　には大和添下郡山村圓照寺前住職として、目下同寺に御寄留の處、今回御伯母に渡らせらるゝ宗諄女王薨去に付き、去る二十七日、京都に赴かれ、三十一日御葬送の式に臨まれたりと聞く。

●宗諄女王殿下の法號　は淨喜法院法山宗諄尼知尙大禪師と定まりし旨、京都葬式主任より、其筋に上申ありしと。

●故宗諄女王御小傳　此の程薨去せられし宗諄女王は、御父は故一品貞敬親王、と申し、御母は前左大臣故從一位一條輝良公女昌子なり、文化十三年丙子九月廿七日御誕生あり、文政七年三月光格大皇御養女となり、靈鑑寺比丘尼御所に住せらる、明治維新に際して、伏見宮に復歸せらる、更らに靈鑑寺住職となり、明治七年六月中教正に補せられ、同十五年八月權大教正に補せらる、夙に御飾下させ給ひ、閑靜幽邃の御住居よ、經卷を離させ給はず、或時御心に感ずる所やあらせ玉ひけん、斯くぞ思召つゝける「心さへさまるばかりそうきとの聞えぬ山は住よかりけり」柔和の性を天に受け、孝心殊に深く、常に泉涌寺後月輪陵、光格天皇御陵、又た相國寺なる御父母の墓を參拜あらせられ、追々御齡高く道心益々堅固に渡らせられ、客年十二月八日光格天皇五十年祭の時、側の者は御老躰の上、御步行如何と氣遣ひ奉りしが、御陵に詣られ聊かの障りもなかりし由、然るに去十五日以來、御心地なら常ず、次第に重もらせ玉ひ、遂に去二十六日薨去あらせられたりと承はる。

●京都婦人教會　京都婦人教會は、昨年二月、下京區五條通西洞院西入長覺寺に開會せし以來既に、一週年を經過せしが、會員六百名の多きに達したるを以て、本月六日七日兩日午后一時より、同寺に於て、一周年祝會を開き、伊佐數氏の講演あり、婦人は何人を問はず來聽を許し、男子は傍聽券あるものを許すといふ。

●婦人の陰德家　一月二十八日、四十二三才の一婦人、突然京都盲啞院の事務所に至り、懷中より紙包を出し、飄然として去る、姓名を問へども答へず、住所を尋れども云はず、强て問ふに及んで、止むを得ず、福田の姓を告げて去る、跡にて紙包を開けば十圓の金ありしと、其志賞すべし。

●靜岡師範學校女子部　の卒業生にして、教師となりたる十二名は、一月六日、同校内幹操室に集合し、各任地の模樣を演說し、教官より祝詞あり、後茶果を喫し、打とけて物語れり、爾後毎年一回靜岡にて開會するとに規約せりといふ。

●インフルエンザ流行に付　靜岡師範學校女子部生徒は、一時休學せしが、頃ろ病勢消滅せしを以て開校せり。

●靜岡師範學校女子部生徒兩名　は高等師範學校入校を許可せられたり。

●濱華産婆學校　此程大坂西區西長堀南通二丁目十九番屋敷に、新たに産婆學校を設立せられぬ、入學試驗は本月十一日より始め、授業は同月十五六日より始むるといふ、縮致皆謂に就て見るべし。

●溫古堂　三重縣津市なる、山内養頤翁の設立にかゝる産婆養成所、溫故堂は、餘程古くよりありて、名高きものなれども、現今生徒は僅に四五名ありといふ。

●一種の流行　此頃三重縣津市あたりにては、所謂中以上の社會に於て、遊藝、茶の湯、生花流行する由、津市櫻町天然寺の住僧は生花の上手なりとて、就て學ぶ者、男女三十名許りもあるといふ亦是れ保守的反動の一現象か。

●沖繩縣の長壽者祝壽　沖繩縣に於ては、去月六日、舊例により、九十歲以上の長壽者に祝壽として、紬一段、泡盛百目づゝ、並に金員を下賜せり、其人數は二十二人、而して男は四人、女は十八人なりとぞ。

●廢娼請願　奈良縣磯城郡百瀨村の岡橋淸四郎氏は、一月三十日、同縣選出の議員、櫻井淸太郎氏の紹介にて、同志百餘名の廢娼請願書を衆議院へ提出したり。

●又廢娼請願の爲め　愛知縣名古屋の小室重弘氏は一月三十日出京したり。

●東京に於て遊廓の不景氣　はますく甚しと聞けり。

●布哇國出稼人を募集す　本邦駐剳布哇國公使より、此程神奈川縣知事に對し、山口、廣島、熊本の三縣下より、布哇國出稼人男八百人、女二百八十人の募集を依賴せりと云。

●京城及び元山在留の日本婦人　昨年十二月の調べによるに、朝鮮京城在留日本人の數は男女合計五百二十二人にして、内女百七十五人あり、又十一月調、同國元山港在留日本人は、男女合計七百八人にして、内女二百六十六人なりといふ。

●日本の出品、異數の光榮　露京聖彼得府に於て、昨年六月十五日より、同二十四日まで開きたる萬國監獄博覽會には、歐亞各國の出品非常に多かりし中にも、精美巧妙を極め、人目を驚かしたるは、我日本の出品なりとぞ、されば其出品の多くは、開會の初日に賣盡したる由なるが、其中殊に異數の光榮を得たるは、警視廳出品の七寶燒の花瓶、大阪府出品の黑檀製茶棚、大分縣出品の花莚にて、何れも露國皇帝陛下、並びに皇后陛下の御用品となりたりといふ。

●日本を名乘る外船　去年十二月十三日、加奈陀太平洋鐵道會社に於て、進水式を行ひたる、二重螺旋の綱製大汽船は、之を「エムプレッス、オフ、ジヤパン」と號せり、即ち「日本の女帝」といふ意味なり、當日の進水式は、加奈陀惣知事の養女たるアリス、スタンレー孃之を擧行せりと聞く。

●獨逸皇后の御慈心　同皇后陛下が、常に編物を好ませられ、御衣の肌着は申すまでもなく、晴れの御上着に至るまで、多く編物を用ひ給へるは、之に因り、世に編物使用の流行を來し、目下編物に老練なる良工女にして、卑しき製造所に雇はれ、下等の賃錢を受けて、哀れ果敢なき生計を營むもの多きを、不憫に思召され、此法を御救助遊ばされんとの御慈心に出るものなりといへり。

●米國の婦人に白頭の少女多し　當時夫と共に米國滯在中なるスタンレー夫人の話に、若き婦人に、銀髮頭の多きと、米國の如きは、諸邦に其比を見ざるとにて、其桃色の頰と、其輝く眼の、銀色の頭髮に映れる處、實に他邦人の及ばざる趣あり、右の通り若年婦人に白頭の多きは、全く街道を來往する車中の溫度甚だ高きが故なるべしといへり。

●露國の盲人　は多きを驚く計りなり、近年の人口調査によるに、ポーランド、コウカシトス等の歐洲露西亞に於ける盲人の數は男女十八万九千八百七十二人にして、內女は九万五千八百十六人なりといふ、斯く盲人の多きは、北地にして絕へず白雪を見るに原因するなるべし。

●パーネルの母氏悲歎を作る　內は黨派首領の意志區々に分裂し、外は强英益々暴慢を恣にす、墳墓の地は日に衰兆をあらはす、かてゝ加へて、最愛の子なるパーネルが政海に於けるの地位、名譽は、一昂一落、搖々泛々、波に漂ふ浮萍の如し、母氏が悲歎は一轉して、激奮となり、頃日「夢後」と題する一悲歎を作る、愛蘭の官民、傳誦して淚を流さゞるものなしと聞く、今まパルマルパチエツトが其詩を抄錄せる者を見るに、冒頭第一に「オヽ愛蘭、余の目は爾の光榮を見るを得る歟」と說き起し、以下一章一句、すべて痛憤の音を帶びざるはなしといふ。

週報

●官令　一月三十一日勅令をもて海軍々人手當金規則中削除の件を裁可公布せらる。

●政治　一月二十一日立憲自由黨と板垣伯との調和成る●二十七日內閣會議●同日日本人發行停止せらる●二十七日立憲自由黨代議士の總會あり。

●經濟　一月二十七日東京機械製造會社の總會あり●二月一日田口卯吉氏木挽町厚生館に於て非地租輕減演說會を開く●同日日本漆工會總會あり。

●衞生　一日私立東京病院開院式●三日大日本私立衞生會月次常會開く

品名	二月四日
白米（一円ニ付）一等米	一斗〇升二合
二等米	一〇六
三等米	一一〇
四等米	一一五
五等米	一二一
正米（一円ニ付）越中米	一斗五升二合
肥後米	一四七
尾張米	一四八
美濃米	一四七
忍領米	一四六
雜穀（一円ニ付）本貫大麥	二斗三升三合
上州小麥	一六〇
梅澤大豆	二一〇
青柳大豆	二〇〇
吟小豆	一四八
白胡麻	一二〇
黒胡麻	一五五
鹽（一円ニ付）赤穗	二俵三分五厘
大鹽	二四五
本齋	三七五
新齋	四〇七
醬油（一円ニ付）最上	樽八分二厘
極上	九五
上物	一四〇
中物	一九〇
並物	二四〇
眞綿（一個ニ付）飛無銘	一一〇、〇〇円
並無銘	一一〇、〇〇
上入金	一二五、〇〇
並入金	一一八、〇〇

品名	二月四日
呉服織物（一反ニ付）御召縮緬上等	九、〇〇円
糸織極上	七、三〇
一樂織極上	九、〇〇
結城紬極上	五、八〇
節糸織極上	五、八〇
本八丈極上	六、八〇
琉球紬極上	五、八〇
銘仙極上	三、八〇
奉書紬極上	四、二〇
七々子稀物	一〇、〇〇
白縮緬極上	一二、五〇
縞珍織極上	二五、〇〇
本國織極上	一五、〇〇
唐縞子極上	一〇、五〇
博多織極上	一〇、五〇
練仙臺極上	九、〇〇
花色絹糸好	
生七十匁付	四、〇〇円
同八十匁付	四、四五
同九十匁付	四、八五
同百匁付	五、三五
同小節絹	
生八十匁	三、二〇円
同本秩父絹	
生百四十匁	四、八〇円
木綿織物（一反ニ付）佐織紺織上	六五錢
納戸織上	四八
生機縞上	三一
とび八丈	三二
美濃双子	四八
物産縞上	六〇
糸入愛國縞	九〇
麻ノ葉絞	四〇
京薄花色	二六

品名	二月四日
乾海苔（百枚ニ付）上總極上々	六五錢
洲崎極上々	九〇
大森極上々	八五
深川極上々	九〇
大師潮田仝	五〇
鰹節（十貫目ニ付）薩摩大上	一六、〇〇円
伊豆上	一七、〇〇
城ノ腰上	一六、五〇
遠州上	一六、〇〇
房總上	一四、〇〇
銚子上	一三、〇〇
南部仙臺	九、〇〇
土佐大	一〇、〇〇
炭（一円ニ付）伊豆上	四俵五分〇厘
同中	四八〇
同並	五五〇
丸備上	二〇〇
角備上	二六〇
石油（一箱ニ付）チヤスター	一、六五円
ホーキ	一、六八
デボース	一、六二
ロシヤ	一、六〇
水油（一樽ニ付）地水	八、四〇円
胡麻	九、五〇
荏油	一〇、六〇
桐油	六、七〇
坂水	九、六〇
味噌（一円ニ付）上赤	六貫七〇〇
紅赤	四、五〇〇
上白	四、八〇〇

女學雜誌大安賣

第百號より、第二百號に至る迄、欠號なく調ひ居るもの多少有之候ま丶**百卷**をば僅に**二圓五十錢**にて前例の如く賣拂ひ可申候、其后欠號を生ずる分八十冊にて**金一圓の**割にて相そろへ賣捌可申候但何れも一と通りづ丶買人を要する義にて其内撰び取りは斷はり候、右百號より二百號に至る間には、出版の當時世を驚かしたる、「日本の家族」。「浮雲の細評」。「理想佳人」。「理想の紳士」。「家内經濟の大要」。「男女交際論」。「經濟雜誌記者との論戰」。「島田三郎氏米國よりの女界通信幾多」。「無名の英雄」。「戸内の戰死」。大鳥圭介氏、德富猪一郎氏、田口卯吉氏、光明寺三郎氏等の女子教育論。月の舍しのぶ氏が「哲女の卷」。「將來の和歌」。「將來の日本人民」。森有禮氏の「妻妾論」。「櫻花爛熳」。「滿目漠々」。饗庭篁村氏が最秀の自作小說とする「昔の夢」。「此大沙漠界一人の詩人あれよ」。「繪畫に於ける國粹保存主義」。「犧牲獻身」。「詩人」。若松しづ子が「忘れ形見」。等の極めて面白き甚だ益あるものを含めり。

廢娼

第七號一月二十六日發行
毎月一回發兌　定價五錢

目錄◎廢娼 ○歲こ丶に新なり○謹て帝國議會議員諸君に白す◎論說○世界に於ける日本梶原保人○發憤論笠原民次郎○廢娼請願案◎餘力 ○紙鳶(畫入)田邊花圃女史◎材料○一讀三歎ベンジヤミン、スコット原著内海愛助譯◎寄書○在京の青年諸氏に訴ふ内海愛助○廢娼慈善市につきて金波女史◎雜錄●新にせん●廢娼建白●叫けべ宗教家よ●然らざれば●黄白行、黄白散人(密畫入)●廢娼バザール●潔士を見たり●存娼雜誌出でたり●年計有餘●久きに在り退ざるにあり●問題●然るを況んや豈遠からんや●怪!怪!●代議士訪問略記(續)●廣告

發行所　東京市京橋區明石町十二番地　**廢娼雜誌社**

女學雜誌新年附錄

女學雜誌**新年附錄**ある第二百四十六號は**賣切**候に付き右附錄即ち「知盛卿」「こわれ指環」の二章のみを別に製し賣價三錢、郵稅二錢にて需めに應ず。今や好評續々踵を接して來るの際、絕版は如何にも殘り惜しく、不取敢如斯。

若松賤子**忘れ形見**は去年中の小說の最傑作なりと不知庵主人の評あり、本年の女學雜誌附錄あるに付き、更に之を想ひ起して彼此と評せらる丶の人多く、注文問合の仁あり、右忘れ形見掲載せし女學雜誌は、田邊花圃女史、中島俊子女史、下田歌子女史著の詩歌小說を附錄とせし一大冊子にして定價依然六錢なり。殘部尚ほ五六十部有之に付需めに應ずるとを得。

附錄女學

女學雜誌直注文の人には、毎月初土曜日に發兌する十六頁物の附錄女學を添え無代にて呈上す。附錄女學の既に發兌したるもの三號あり、一號には若松賤子女史の英文、雲峰子の長歌、小島宮吾氏の論文を揭げ、二號には安藤太郎氏の禁酒演說筆記をせ三號には雲峯子が新譯盲女行の長韻文を載す。右直注文以外の人には一冊四錢づ丶にて賣捌くと云へども、今后直注文被成候仁は、其以前の分を右定價にて買受たる后ち以后の附錄は無論無代價なる事。

廣告

今般當校ヲ設立セシニ付入學志願ノ者ハ來ル二月十日迄ニ願出ズ可シ規則ハ郵券二錢ヲ投セバ進呈ス

一月　日

大阪市西區西長堀南通二丁目拾九番屋敷
私立**浪花產婆學校**

新發明良藥廣告

ひゞしもやけの藥

冰解水

定價 壹瓶金拾錢 小瓶金三錢

此冰解水は胼胝、凍瘡の特効藥にして○ひゞは一度ぬればなをるしもやけのかるきは一日をもきは一週間にてなをるべし○寒中ひゞしもやけを患る御方は常に入浴のあとにてぬりをけばいかなる寒冷の時にても皮膚の飽よくひゞしもやけの患ひ決してなし○しもやけは小兒に多くして其手足に發したる初め知らずして既に皮膚剝脱したる難症に至り始て藥を求むる方多し然る時と雖も此藥を充分ぬれば早く治するなれど其剝脱部へ度々ぬるをいとふゆへ可成剝脱ざるあいだに此藥を用ひ治し給ふべし此藥は口中へ入るも差支なきゆへ唇のあれ等に用て至極良し其他○やけど○瘡等に良効あり

本舖 大阪府南郡岸和田 平松保三

元發賣 東京兩國米澤町 大木口哲

同 大阪四ッ橋東南詰 本林平三郎

獨逸語學獨習誌

●本誌は深奥精微なる獨逸語を獨習する者の便を圖り兼て日々良師に親炙する者の參考に供す

●本誌は獨逸語の綴方譯讀音讀より進むで文法作文會話各大家の文集專門の學術を鑽研せしむ

●本誌は每號必ず斬新有益なる熟語及ひ名詞の辭典を附し他日一種の成書となすを得せしむ故に讀者は一般の便益を得べし

●本誌は地方僻地に於て別に教課書の購求を要せざるの新趣向あり

●本誌は鮮麗なる習字帖を附し習字の便に供す

●本誌は丁寧平易を主とし務めて讀者をして進學の愉快を得獨逸學の妙味を咀嚼せしむべし

此言の謬なきを知らむと欲せば請ふ二月廿日發兌の第壹號を繙け

●一部拾錢拾部前金九十五錢廿部以上一割引●郵券代用一割增●郵便爲替は成蹊堂宛芝口郵便支局え向け振込むべし●郵稅不要●廿部以上前金振込の方は校外生として自由に質疑するを得●一號は二千部限り印刷す故に望の者は至急申込むべし

●每月五日廿日二回發兌

東京芝區田村町一番地 醫學科藥劑科通信講義發行所 **成蹊堂**

大賣捌 日本橋區馬喰町島利 全通三丁目丸善 京橋區三十間堀町新聞發賣會社 本郷切通南江堂

日本未曾有 洋服形紙

壹枚十錢ヨリ 壹組六十錢迄

此形紙ハ方今歐米ニ其名ヲ博スル新法式ニ由リ裁斷ス○誰デモ容易ノ洋服ヲ裁チ得○從前ノ裁法ヨリ裂地ヲ減ス○格好ハ歐米ニ流行ノ新形○其姿書ノ寫眞ヲ添フ○洋服商○仕立匠○女學校○裁縫學校等ニハ不可欠要品○詳細書望ノ方ハ郵券二錢送ルベシ

○**裁斷** 洋服地持參ニテ裁チ計ノ依賴ニ應ズ

○新發明 **婦人用股引形紙** 定價大人分十五錢小供分十錢郵稅二錢

右ハ本館ノ新發明ニシテ兩便自由日本婦人ニ適當衛生上不可欠要品殊ニ寒氣ノ候敎塲ニ於ケル女學生又婦人外出ノ節等ニハ必須物也○新年ノ御祝トシテ二月中右股引形紙ハ定價ノ**半價**トス

洋服調進 新法式裁縫ト精練ナル縫手ニヨリテ調製ス

○**羅紗** 及洋服裏地ボタン其他○裁縫ニ關スル一切ノ諸機械多少ニ係ラズ廉價ニテ返買遞送ス○羅紗見本入用ノ方ハ郵券八錢投ズヘシ○本館ヘ注文總テ前金○多分ノ資金ヲ不要洋服商ヲ開キ何時其業ヲ停止スルトモ少シモ資金ヲ不失方法アリ望ノ方ハ來談アレ

大坂北久太郎町三丁目 山口 **朝陽館**

廢娼運動費義捐の廣告

一金參拾圓四拾三錢四厘

右は二十三年十二月中に開きたる、廢娼バザールの純益幷に全會への寄附金より得たる者なるが最初の目的通り一月中に之れを、東京廢娼會幷に廢娼壯年義會の兩會へ、各平分して義捐致候に付此段廣告致候也

明治二十四年一月

廢娼バザール會發企人

明治女學校女子職業部規則

○本部は女子に職業を敎授する所とす○本部に於て敎授する職業は裁縫。縫箔。圖繪の三科とし各科の卒業を二年とす（但編物は各科生共隨意に學ばしむ）○本部は別に主計科（五ヶ月卒業）を置き簿記。筆算。用文。速記術に熟達せしめ書記主計の任に適する婦人を養成し新聞社。會社。銀行。商店の傭聘に應ずることを得せしむ○本部普通生の外に兼修生を置き都合に依り二科以上を兼修することを得しむ（殊に他の學校生徒及家事を取る人の爲めに便利を謀る）○本部の授業時間を一日七時間とし內二時間を讀書算術及修身上の講話に充つ○授業料は普通生を一圓とし兼修生を其半額とす○入校を望むものは年齡學力の定限を置かずと雖も品行方正にして必ず慥なる保證人を立て束修一圓を持參す可し○寄宿を望むものは本校の塾舍に入れ其監督を受けしむ

明治二十四年一月始業

東京麴町區下六番町六番地明治女學校內

女子職業部

發行所

東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

天賞堂時計發賣廣告

瑞西國シイベル、フレンソルド横濱新九十番商會專賣に係る時計の精巧堅牢なるは江湖の熟知せらるゝ處弊堂該懐中時計數十種中に就き左の八種を撰擇し廣く之を發賣す



(金側)丁價六十圓十八金廿一形片硝子持出し付金針入龍頭卷懐中時計器械本ニツケル卷上げ聲向ひ爪左アンクル二番より惣石入●丙價七十圓同裏三枚蓋●乙價七十五圓同無雙●甲價九十八圓同裏三枚蓋●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢●(銀側)丁價八圓片硝子廿一形金針入鍵卷懐中時計器械プラチナ滅金向ひ爪左アンクル●丙價十一圓半同龍頭卷向ひ爪右アンクル●乙價十五圓同本ニツケル卷上ゲ聲二番より惣石入●甲價廿一圓同七所金●各器械構造概略圖の如し●東京市外遞送費廿錢

右時計は器械の堅牢なる弊堂が說明を待たざる處なり然れども特に御請求の分に限りて左の手續に從ひ正確の保險狀を呈すべし○保險を要せらるゝ場合は御購求の當時と既に御購求の後に在るとに拘らず各一個に付左の保險料を申受べし　一金側金五圓　一銀側金二圓○保險年限は金銀時計共二十箇年を以て限とす○保險年限中は特に諸器械及び硝子の破損修繕油さし磨き直しの手入は無代價とす○保險年限中自然器械の變化を生じ使用に堪へざる事あれば何時たりとも同種にして新規なる者と交換又は原價を以て返却すべし●保險の有無に拘はらず**御購求後三十日以內に限り交換又は原價の返戻を要せらるゝときは其望に應ずべし**

今回又左の時計及時計附屬品洋服裝飾品各種を發賣す●但し時計は保險手續其他總て前文による

米國製(金側)十八金廿一形無雙龍頭卷懐中時計甲價百五圓●同乙價九十五圓●同十四金甲價七十三圓●同乙價六十三圓●(銀側)同甲價廿圓●同乙價十六圓●同片硝子價十五圓●(金着側)同無雙甲價廿九圓●同乙價廿五圓

瑞西國製(金側)十八金廿一形無雙懐中時計器械本ニツケル卷上げ聲向ひ爪左アンクル二番ゟ惣石入價六十五圓●同十四金價四十九圓●同十八金裏三枚蓋乙價九十二圓●同甲價百十圓●同七曜及日指し付價百四十五圓●同コロノカラフ引打月の滿缺十二ケ月七曜及日指し付價三百五十圓●(銀側)廿一形無雙裏三枚蓋金針入龍頭卷懐中時計器械本ニツケル卷上ケ聲向ヒ爪左アンクル惣石爪石入價三十六圓●同片硝子右アンクル價廿九圓●同中硝子價廿六圓●同片硝子鍵卷懐中時計器械本ニツケル卷上ケ聲向ヒ爪左アンクル價十一圓●同惣石入價十五圓●同爪石入價十八圓●

貴婦人持時計(金側)十八金十三形無雙龍頭卷懐中時計價廿九圓●同裏三枚蓋價四十五圓●同片硝子價十七圓半●同無雙金剛石裝飾付價六十六圓

時計附屬品 鎖及磁石寫眞入黄金製見留印付及鉛筆其他各種

指環 金寶石入各種

洋服裝飾品 腕輪胸飾ピン手ボタン其他各種

交詢雜誌評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は米國製及び夙に時計の製作を以て世に有名なる瑞西國の製品にしてその器械の堅牢なることその構造の精緻なることその裝飾の美麗なること何れも世間の好評に違はさる眞品なり尚且購求後三十日以內は購買者の自由に之を取換又は返還するを得て望みに依れば二十箇年を限り之を保險しその年限中は無代價にて之を修復するよしなれば購買者の爲め更に一層の便利なりと云ふべし

東京日日新聞評

○天賞堂の時計　京橋區尾張町二丁目十八番地の天賞堂にて此程より發賣する金銀時計は歐米製造數千百種の中につき特に器械裝飾の善美完美なるものを撰擇せしものゝ由にて從來舶載の物に比すれば堅牢精緻なる同日の談に非ざるが如し殊に時計一個毎に丁寧親切なる心得書を添へ又二十年間の保險を附し購求後三十日以內は物品の交換原價の返却とも購客の望に任ずると云へば自然適意の品物を入手するを得べきなり猶前日來の廣告につき其詳細一覽あるべし

時事新報評

○天賞堂ノ時計　尾張町二丁目ノ天賞堂ニテ發賣スル時計ハ何レモ機械ノ堅牢ナルモノヲ撰ミ購求者ヘ取扱ヒ方心得書ヲモ與ヘ買取後三十日以內ハ交換或ハ原價ノ返却ヲ求ムレハ其望ミニ應スルトノコトナリ

朝野新聞評

○天賞堂の時計　印刻を以て名ある尾張町二丁目天賞堂にて發賣する時計は各種の時計中に就き特に撰擇せしものにて在來の時計に比し機械も餘ほど堅牢精功なるに一個毎に取扱心得書を添へ且購求後三十日以內は都合に依り交換又は原價の返却を求むる時は其望みに應ずる由

郵便報知新聞評

○天賞堂時計　彫刻ニ有名ナル天賞堂(京橋區尾張町二丁目十八番地)ヨリ發賣スル時計ハ米國製或ハ瑞西國製ニシテ器械堅牢且ツ裝飾美麗ナルヲ以テ大ニ評判ヨク殊ニ購求後三十日以內ニ現物ガ氣ニ入ラヌ時ハ他品ト取換ヘ又ハ原價ヲ返戻スルヨシナレバ購客モ大ニ安心シテ買求メ望ミニヨリテハ保險ヲモ附シ其ノ年限內ハ器械及ヒ硝子ノ破損等ノ修復ハ無代價ナリト云フ

日本人評

○天賞堂の時計　尾張町二丁目の天賞堂より發賣する時計は、歐米各種の製造品中より就き、特に器械の堅牢なるものを撰擇して、一個毎に丁寧なる取扱方心得書をも添へ、其上二十年間の保險を附するのみならず、購求後三十日間は、品物の變換、代價の返還とも凡べて其の望み通りに任かすと云へは、購買者に取ては至極便利なりと云ふべし。

東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

天賞堂